
NARUTO ~ナルトの義理の姉は十尾の最強忍者~

?魔歩?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NARUTO ～ナルトの義理の姉は十尾の最強忍者～

【コード】

N8073W

【作者名】

? 魔歩?

【あらすじ】

幼い頃、バケ狐の事件によって両親を無くしてしまった主人公。

そんな両親の形見と言ったら小さい時、我愛羅とお揃いで貰った青いペンダントに十尾の封印物だけだった。

設定です () (変更、

【名前】：天野 莉那

ナルトの義理の姉でもあって、十尾でもある。
尾獣にもなる。ナルトが赤の狐となり、莉那が水色の龍
になる。

チャクラは滅多に減らない。
火影以上の実力者。

【性格】：誰に対しても優しく、笑顔を絶やさない。
その成果、十尾とはすっごく仲が良い。
怒る時は半端無く恐ろしい w w w
我愛羅の事になると、すっごく詳しい。
初恋の相手が我愛羅。

【容姿】：黒髪でいつもポニーテールかサイドテールにして縛って
いる。

【瞳】：瞳は澄んだ緑色。

【服装】：黒と紫をモチーフにした感じで…

短丈T & amp; ボーダータンク（黒 & amp; 灰色）
にサルエルパンツ（黒）を着用。

マツリが腕に付けてた…ガードみたいなのを付けている。

【能力】：五大性質、医療忍術を使う。

写輪眼、百眼に似て【劉冬眼】*【龍樺眼】を使用する。
後から最強の瞳眼、【月海剎瀏樺眼】を開眼させる。

? 砂漠の我愛羅と同じ特質で【水】と【氷】と【草】が
盾となる。

【口寄せ】：ポケモンのエンテイ・ライコウ・スイクンを口寄せする。
三体の前足（右側）に木の葉の額当がある。

ドラゴンも口寄せをする。

熊の條楼颯

大鳥の鶯駕州。

鳳の鶯駕州

風遁：炎蒔轟樹

龍のゼシル

猿猴王：猿魔 三代目火影死後・猿魔から『力になりた
い。三代目の敵打ちをしたい』と、泣きながら言われ、それを解任
し、新たな口寄せ動物となった

【劉冬眼】について

劉冬眼はテレパシーにもなったり、耳と目を通じて実際にその場の話や映像を映し出される。

未来を見る事も出来るから戦闘中にはすごく役立つ。

【龍樺眼】：万華鏡写輪眼と似て、相手に幻覚を見せる。

龍樺眼はどんな強力な相手でも一発で死なせる事も出来る。

【月海刹瀏樺眼】げっかいさつりゅうかがん：世界で最強の瞳眼と呼ばれ、全てのチャクラも術も無効にする事が可能。

だがそれは、とてつもなく強者しか開眼させられなく、天野一族でも一人しか開眼させた者はいない。

それを開眼させようと必死になる者はいたが、開眼は出来なかった。

【技一覧】：螺旋丸

雷遁：黒斑差・流水瀑流・水遁：簾縛水

沸遁：霧氷獄・急襲裏紅・変わり身の術

水化の術・水遁：豪水腕の術・水襲剛流豪雨

影操り・頭叩き起こしの術・水遁・水牙弾

水遁：馮俊豹刹スイクンヒの術

天野忍法：伍死落花情焰エンテイ・ライコウヒの術

【独自忍法】：莉那忍法：桜蘭走權

龍駕刀

・龍駕颯劍濫

【名前】：闇月ナイト

莉那、歌怨と同じスリーマンセルの一人。

チーム1の俊足でもあり、片手でも印を結び、容赦無く戦う。

【性格】：毒舌な所もあるけど、シカマルのようにめんどくさがりな一面も。

嫌いなものは”弱い奴”

【容姿】：多分ですがポケモンの謎の人物だったかな…シルバーかな？

【能力】：属性が”炎”と闇でもあって火遁をほとんど使う。血継限界の血が少し流れている。

【口寄せ】：主に狼など野獣などを口寄せする。

狼雷暴

闇月忍法：豪華水煙？轟

口寄せの術・大狼

【技一覧】：火遁：炎爆弾

闇月忍法：孔雀惣寿 火遁：錘艶聞の術

溶遁：溶怪の術 火遁：火走り

火遁：火龍炎弾

変わり身の術

火遁：火柱の術 火遁：炎導豪炎の術

【名前】：音殺歌怨

右頬には何かの紋章みたいなものがある。（ジェラール似）

サクラみたいに人一倍の観察力と洞察力を持っている。

怒る時は物凄い殺気を出し、かなり強い

【能力】：主に属性は闇と雷と風。

うちは一族では無いけど写輪眼や万華鏡写輪眼を使用する。

霧もたまに使う

【口寄せ】：悪魔なども口寄せする。（W）

大蛇丸と同じで大蛇も口寄せ可能

【技一覽】：黒い霧・雲分身・変わり身の術

霧絨毯・黒霧落刹・瞬身の術

金縛りの術・万蛇羅の陣

雷遁…豪電柱・麒麟

神楽心眼

風遁…風切りの術

ふうとん・かせぎりのじゅつ

【刹焰の剣】（二刀流。大量の電気を流す事も可能。五大性質によつて威力が変わる）

孔雀二双昇剣…旋猛風

くじやくにそつじょうけん・せんもうふう

風斬り（かせぎり）

孔雀旋風

豪空砲

仙法…風遁砂埃

せんぽう・ふうとんすなほこり

【写輪眼】：魔幻…枷杭の術

魔幻…鏡天地転

天照・須佐脳乎

別天神

月詠

無限月読

【第11班の司令官】

【名前】 …雨野マコト

【性格】 …天然な所もあり、時間にはいつも遅れる。

凶星になる事もしばしば；；

だが、特訓・任務になると厳しくなる。

自分の趣味で重りを30にするなど、ガイよりも危険人物。

アスマの永遠のライバル（らしい）

自分の部下を信賴し、世界で一番最高だ…と思っているらしい。

【容姿】 …中忍試験の時の音隠れの額当てをした大蛇丸に似ている。

【能力】 ……不明。

【分かった事】 …体術・幻術・忍術のどれも得意とする。

【名前】 …我愛羅

多分原作と同じ

莉那の事を守る一場面も。

どんな人でも殺そうとするが、莉那だけには殺さず手を
ださない。

(?前に一度、殺そうとした事はあったが、水の盾と母
親に邪魔される)

初恋の相手は莉那

【名前】：カンクロウ

原作と同じ

莉那が好きで、良くちよっかいを出している。

我愛羅が好きだと知っていても、告白をする

初恋の相手は莉那。

【名前】：うずまきナルト

莉那の義理の弟

姉を誇りに思っている

姉一筋

【名前】：うちはサスケ

莉那が好きだけど、認めたくない。

ナイトや歌忍が嫌いらしい。 同じ班だかららしい・・・

第二部からは…余り変更は無いかと思います!!!!

主人公たちについて

天野莉菜

・ナルトの義理の姉でもあり、十尾の妖龍を体内に封印している。

天野一族の子孫でもあって、良く劉冬眼を使用する。

三体のライオンを口寄せし、戦闘。

初めての任務でも劉冬眼を活かし、チームをまとめていた。

両親を殺した張本人がナルトの体内に封印されている九尾だと知っ
ていても明るく振舞っている。

我愛羅との関係は、幼い頃、母親と砂の里に任務で言った時に出会
った。（そこは本編で書きます！）

数年後、再開してから我愛羅の行動を可笑しく思う部分もあった。

だけどそれでも我愛羅が心配という優しい性格の持ち主だった。

そして天野一族の血型で、死者を蘇らせられるということも出来る
すごい能力の持ち主だった。

だが生き返らせる為の条件では、【その者を思う優しい心】で、そ
の者を思う気持ちで蘇らせる力が変わるのだった。

そして天野一族の生き残りでもある。

両親はバケ狐事件によって他界。

他の者は大蛇丸に殺害されて、他界する。

一族の血が物凄く流れていて、相手が使った術を見て真似る事も出
来る。

実力は分身でも初代火影・二代目火影と対立し、大鷹の鶯鷲州を口
寄せしていてもチャクラは全然減っていない、息も乱れていなかった。

それ程、妖龍とのチャクラが一体化していて負担にはならないらし
い。

どんな時でも妖龍と一体化になれる。

闇月ナイト

片手で印を結び、息の根を止める程まで戦うのが自分流。

たまにM。他の人たちには冷たいがチームの人たちには優しい。

主に狼など野獣を口寄せする。

第十部では狼雷暴を口寄せし、闇月一族の忍法、『闇月忍法・豪華水煙?轟』を使う程だった。

だが、実際の力はこれを遥かに超える想定外のチャクラ量を放出するのだった。

莉菜を信頼していて主に心を開いている。

そして歌怨とはライバル関係(そう思っているだけ)であるらしく、

最初は気が合わない…と思っていたまでだった。

また、マコト先生に始めて出会った時も敬語ではなく、タメだった。

音殺歌怨

クールで静かな性格（？）

影を自由自在に操る事も出来て、黒い霧で姿を隠す事もある。

上忍の幻術を尽く見破り、上忍相手でも息一つ乱れず戦闘。

またチームメイトを思う気持ちも強く、三人を信頼している。

幼い頃、両親を暗殺され、写輪眼を開眼。

歌怨の父親も写輪眼を開眼していた。

背中にある沢山の刀（？）も、音殺一族秘伝の刀でいつも大事そうに持っている。

そして【刹焰の剣】という物も所持しているけど、第二部辺りでは使用しない。

アカデミー時代は良く女子からの人気も高く、成績も優秀だった。

それでも女が大嫌いらしく、余り女子とは喋ろうとはしなかった。

唯一女の子で心を開いていたのは、莉那だけだった。

他の女子には睨んだりして、絶対に話そうとはしない。

【雨野マコト】

莉那・ナイト・歌怨の上忍。

良くカカシやガイなど下忍担当の上忍には『大事な愛すべき部下』
と言い、三人を信頼していた。

時には三人を鍛えようと重つを30tにしたりと、自分の趣味で特訓させていた時もあった。

任務では良くフォーマンセルで行なっている。

そしてカカシと同じで良く時間には遅れてやってくる。

任務成功帰りには三人に食事とかを奢るなど優しい一派面もある。

001*忍術学校!!!

始めまして天野璃南です。

両親を無くしてから10年。

私はそれでも挫けずに義理の弟でもあるナルトと頑張っています!!

お父さん・お母さん、天国で私達を見守っていて下さい!!!

良く劉冬眼の練習で過去を見た事があって…話によれば、ナルトのお父さんと私のお母さんが兄妹だったらしくて…クシナさんとお母さんは赤ちゃんが物凄く欲しかったらしくていつもいつも赤ちゃんの話をしてたらしいんだ。

お父さん(夜影ハヤト)は風影三代目様の孫であってお母さん(天野屢樺)は雨隠れの里のくノ一だったらしいの。

余り昔の記憶は覚えてないけど…この青い氷のようなペンダントが私を守ってくれるらしいの。

お母さんが私を守ってくれるようにペンダントを亡くなる数日前に

くれたんだって。

＝ナルトの部屋＝

璃南

「ナルト。起きて」

そんなナルトは夢を見ているらしく、寝言を言っている。

ナルト

「もう…食べれないってばよZZZZ」

（はああああ…やりますか。）と心の中で言い、印を結んだ。

<<影操り>>

ムクツとナルトの上半身が90度ピタシになって座っていた。

ナルト

「ハハハハ…：：：璃南姉ちゃん（滝汗）」

璃南

「ナルトへ言へ貴方は何時になったら起きる気？」

ナルト

「ゴメン！だって夢のラーメンがすごくおいしくて…っいつい…」

璃南

「言い訳無用」

<<頭叩き起こしの術>>

そう印を結び、言っとナルトは自分の手で自ら頭を叩いてた。

それが私自作の頭叩き起こしの術。

以前前にも忍術学校の入学式で遅刻しそうになった時、私自作のこの技を編み出した訳ですwww

〓IN学校・教室〓

璃南

「おはよー」

「「おはよー」」

いの

「やっぱり今日もサスケ君はかっこいいわね／＼／」

女2

「ナイト君だっかってかっこいいわよ／＼／」

女5

「それいっなら歌怨君もよあー！！！！／＼／」

サクラ

「何言ってるの！！サスケ君が一番よッ！！！！／＼／」

朝、来ると必ずこれ何だよね………

このクラスのほか、全員がナイトや歌怨やサスケに目が行くと言っ
か…

私もその一人の女ですが…そういうのは興味無いと言っか…WWW

と、訳の分からない喧嘩が始まり…一人ずつイルカ先生に変化するテストをやる事になった。

「IN次の日・卒業試験当日」

イルカ

「えー…名前を呼ばれた者から隣のクラスに来るように」

出席番号順で座る為、私は一番前に座っていた。

天野だしねww

そんな後ろの席はナルトとヒナタが座っていた。

ナルト

「今年こそ絶対に受かってみせるってばよ!!!」

ヒナタ

「ナルト君。。。頑張ってね／／」

ナルト

「おうwあつ、、璃南姉ちゃん、呼ばれてるってばよ」

璃南

「本当だ、ナルト、絶対受かろうね じゃないとおじさん（一樂の）が私達の為にも作ってくれたラーメン、食べれなくなっちゃうよ??？」

ナルト

「勿論だつてばよおおお!!!!!!!!!!!!」

ヒナタ

「璃南ちゃん、ノノ頑張つてねノノ」

璃南

「うん ヒナタもね」

「IN隣の部屋」

ミズキ

「どどぞ（ニ）」

璃南

「お願いします…」

<<分身の術>>

<<ボオオオンッ！！！！>>

イルカ

「卒業試験…合格だ」

璃南

「ありがとうございますッ！！！！（涙）」

卒業試験が終われば、私は目にいっぱい涙の粒を溜めてイルカ先生から木の葉の額当てを受け取った。

それから…時は過ぎて…ほとんどの人が学校の中から出て来た。

私は日光の暑さに負けて、木の上に上りナルトが出るまでずっと待っていた。

何分間…何時間経ってもナルトは出て来なかった。

やがて生徒と親共々帰っていくけどそれでもナルトは出て来なかった。

流石に心配になった私はイルカ先生の元に移動した。

「IN職員室？」

璃南

「あの…イルカ先生…」

イルカ

「おや？璃南じゃないか。

卒業、おめでとう」

璃南

「ありがとうございます…じゃなくて…ナルト、知りませんか？」

イルカ

「ん？ナルト？？知らないぞ。試験に落ちて凹んでると思うんだ…」

璃南

「!!!?…ナルト…落ちちゃったんですか??」

イルカ

「ああ。所謂…分身は出せた物の中身が無い分身…だったからな…」

璃南

「そうですね…」

「今年こそは絶対受かってみせるってばよッ!!!」

「璃南姉ちゃん!俺が受かったら一緒に一楽のラーメンで祝うってばよッ!!!」

ナルト…あれだけ受かるって…受かってみせるって…

夕方では一旦、家に帰った。

ご飯を作って待ってたけど夜の23時を回ってもナルトは帰って来なかった。

<<劉冬眼ッ!!!>>

『どういう事だってばよ…イルカ先生…』

血？大きな手裏剣？？

先生がナルトを庇ってる？？？

『ナルトー。その巻物をこっちに渡せ。お前がそんなの持った所で意味は無いんだよ』

この声…ミズキ先生？

まさか…木の葉の封印書をナルトが持ち出したの！！？

気づけば私は、劉冬眼で見た森の映像とかの確認をして誰も使ってなさそうな森にやって来た。

<<50M先・移動中>>

上忍が二人…ナルトが巻物を持って移動してる…てことは…ナルトが危ない。

何としてでも助けなきゃ…。

風を切るかのように私は猛スピードで向かった。

（キイインッ）

手裏剣がぶつかりあう音がする…。

様子を見る為、私は近くの高い木の上で様子を見た。

ナルトがいない…イルカ先生とミズキ先生が戦ってる…

それにイルカ先生が血だらけ…どういう事??

そして…イルカ先生が痛みの余り、倒れた。

それで九尾の封印がナルトのお腹に浮かび上がった。

璃南

「……………」

ミズキ先生が最後のクナイで決めようとした時、ナルトがミズキ先生を殴り返した。

（ ）

ナルト

「分身…が…出来たってばよーッ！！！！！」

璃南

「ナルトッー！！！！！」

その声にビクッと身を震わせるナルト。

ナルト

「璃南姉ちゃん…その…（汗）」

璃南

「怒りたいのもあるけど…これでナルトも卒業試験、合格だね（にこ）」

ナルト
「…え…？」

イルカ
「ああ。璃南の言つとおりだな。…てかいるなら手伝いに来てくれよ」

璃南
「えーwww木の上で観戦してた方が良かったかなーとwww」

イルカ
「全く…だけどナルト、卒業おめでとう」

そういつて額当てをナルトに差し出すイルカ先生。

私も優しい笑みを浮かべてナルトを見つめる。

ナルトは大泣きをしながら抱きついて来た。

璃南
「ナルト」。イルカ先生は負傷中だよwww」

ナルト

「わわわわ（汗）悪いってばよッー！！！！イルカ先生ー！！！！」

イルカ

「アハハハハハ」

璃南

「って治療しないと！！！！先生、本当に死ぬよ？」

イルカ

「それだけは駄目だッー！！！！璃南頼む！！！！直してくれ！！！！」

ナルト

「イルカ先生ッー！！！！死なないでっばよー！！！！」（抱）

璃南

「アハハハ」

お母さん…お父さん…アカデミーの卒業試験、合格したよ

これからも私達を見守っていて下さい

002*チーム発表&初めての任務はBランク!?!? †前編†

あれから…楽しい日々は過ぎて今日は下忍としての説明会が行われた。

勿論ナルトはそれまで額当てをせずに大事にしまっけて置いた。

そんなナルトは今日、ノリノリ状態

ナルト

「璃南姉ちゃん!!俺ってば似合ってる???」

璃南

「ん…:…どうかなー???」

ナルト

「ええー!…! (泣) けどさ!…! けどさ!…! 今日から下忍なんだよな」

璃南

「ナルトもようやくアカデミー卒業したしね
一楽のおじさんもすごく喜んでたよね」

ナルト

「そうそう!!」「ナルトも、やっと合格か」「何て泣いてたっ
てばよな!?!?!」

璃南

「それ程ナルトは子供だったって事だよね」

走り出す私。

ナルト

「子供じゃないってばよッー!?!?!」

と言い、その後を追うナルト。

だけどナルトは少しだけ成長したかもね

＝INNアカデミー＝

ナルト
「　　」

璃南

「それ程嬉しいの？」

隣同士で座る事となった私達。

その窓側にはサスケが座っていた。

ナルトがどうしても”サスケの横は嫌”って言って何故か私が真ん中に座る事となって… W W W

そんな中でも他の女子達は誰が座るかとかで喧嘩中。

ナルトは御構い無しに変な不気味な笑みを浮かべる。

ナルト

「やっと下忍だつてばよ〜ニヒヒ〜」

???

「うわwww何変な笑みを浮かべてんだよwwwてか何でお前がここにいんだよ??？」

ナルト

「シカマルうゝこの額当てが目に入らないかってはよ????」

シカマル

「マチかよ…お前、合格したのかよゝ。めんどくせえー」

奈良シカマル

口癖は「めんどくせえゝ」「らしいんだけど…」

シカマルの主な属性は影。

奈良一族では「陰操り」「影真似」など使うんだ。

ナルトは良くシカマルと一緒にいて、つい最近まではキバ、チョウジ、ナルト、シカマルの4人でイルカ先生に怒られてたぐらいなんだwww

それ程、ナルト達は義務教育上大変だったらしいの……

「はいはい。五月蠅いぞー。席に着けー」

「はぁーい」「」

イルカ

「まずー：卒業おめでとう。これからは木の葉の忍びとして役に立てれる様頑張る事だ」

「はぁーい!!!!」

イルカ

「よし。今日、ここに呼んだのは三忍一組での班を作る事だ。

これから先、任務をこなして行く上でその三忍一組で協力をして強くなっていくんだ。

そして割り当てられた上忍の先生とも絆を深める事だ。」

「はぁーい」「」

イルカ

「名前を呼ばれた者は返事をするように」

「……第七班。うずまきナルト、春野サクラ、うちはサスケ」

何か…ナルトの反応が面白いwww

「「第十一班。天野璃南、闇月ナイト、音殺歌怨。以上の三名だ」」

ナルト

「闇月???音殺?????」

え?何か女子は羨ましそうな瞳で見に来て、男子は目が死んでるんですけど…www

イルカ

「もう少ししたら上忍の先生が来るから、それまでに待機するよう
に」

そついい、そろそろと上忍の先生が入ってきた。

「「第一班の者」」

そして…教室に残ったのは…

ナルト

「遅いってばよッー!!!」

ナイト

「黙れ。ウスラトンカチ」 W W W W W

ナルト

「何ー!!!?」

サスケ

「ボソ」ウ斯拉トンカチ…二人」

これは聞かなかった事にしといてもいいのかな… W W W W

サクラ

「何してるのかな…」

後残ってるのは第七班と第十一班のみ。

退屈して来た W W W

（ガラガラッ

???

「すまない。遅れた。第十一班の者は？」

璃南

「あ、、はい」

何故か私達三忍はジャンプして教卓の手前で着地した。

???

「すまない……では行くとするか」

ナルト

「なッー！！！！俺達の上忍まだー！！？」

教室の向こうでナルトが叫んでいたのにも関わらずナイトは「「バタンッ」「と閉めた。

「IN噴水」

???

「任務で少々遅れたが……自己紹介から……とするか」

歌怨

「まず、貴方から名乗って下さい」

???

「そうだなw俺は雨野マコトだ。好きな事は…無いな。嫌いな物は…特に無いな」

ズコッ。

ナイト

「結局分かったのって名前だけだろ」

マコト

「ハハハ。まあ次はお前達の番だ。左端からだな」

歌怨

「音殺歌怨。好きな事・嫌いな事を教える気は無い。
俺の野望はある男を”殺す”事だ」

マコト

「(…やはり…)次」

璃南

「天野璃南です。好きなというより…大事な人がいます
嫌いな事とかは…今はありません」

マコト

「（十尾の少女か…）次…って最後かw」

ナイト

「闇月ナイト。嫌いな者は五月蠅い奴に弱い奴だ」

何か…悪意のこもった自己紹介だね…；；；

マコト

「歌怨に璃南。ナイトだな^^よし。早速明日は任務という事だな」

璃南

「え??？早速任務何ですか??？」

マコト

「ああ。お前達三忍はアカデミーでの能力を見た限り、下忍とは思
えない程の実力だ。

それにこの任務は火影様からの案でもある」

ナイト

「んで、何ランク？」

マコト

「Bだ」

「「B!？」」

マコト

「主に警護だな。今回の以来内容はある人物を無事に家までお届けする事だ」

歌怨

「案外…すごいな」

マコト

「だろう。Bランク共言えども中忍・上忍向けの任務だ。

それにこの任務には深い意味は無いと思っただら大間違いだ。

この任務を通してこの四人の仲を深める事も大事だ。

一人一人が自分勝手な行動をせず、仲間を助ける思いやりの気持ちも大事だ」

「「はい」」

マコト

「よし。今日は一旦解散…だな^^」

「「ありがとうございました」

と、言いそれぞれ散らばる。

「IN家」

冷蔵庫に張られた紙を見た。

「璃南姉ちゃん。

今日はカカシ先生の家で泊まるってばよ。

明日には戻るってばよ。それじゃーおやすみだってばよ」

璃南

「明日…か…私も朝早く出かけるんだよね…」

私はナルトが書いた手紙の下ラ変にも書いた。

『ナルトへ。』

そっか。帰って来たら感想を教えてね

それと今日は任務で留守なので、冷蔵庫の中に牛乳が閉まってあるし、

戸棚の中にもカッププラーメンがあるからそれを食べてね。

それと人には迷惑を掛けない事』

それだけ書くと私は自分の部屋に入って行った。

明日の…って言ったとしても期間は一週間になるかもしれないしね…忍具とかも沢山いるだろうし。

時は過ぎて…次の日。

朝早く起きて木の葉の門前に向かう。

そこが待ち合わせ場所になってるのにも関わらず…一時間経過。

歌怨

「上忍はまだかよ…」

璃南

「…はああああ。」

ナイト

「……………あんな上忍が俺らの先生でいいのかよ……………」

璃南

「…多分大丈夫…かな？」

歌怨

「疑問になってるぞ」

璃南

「アハハ^^…」

沈黙になった数分後、風と共にマコト先生ともう一人、年老いたおじさんがいた。

マコト

「いや〜遅れた。すまないな〜」

歌怨

「今回、警護するのはそちらの方ですか？」

ナイト

「しかねえーだろww」

マロト

「まっ、そういつことだな。船橋さん。こちらが私の部下共です」

船橋

「こんなガキ共に任せてもいいのか??」

ナイト

「なッ!？」

船橋

「よっぽどの実力だと聞いたんじゃが…」

歌怨

「……ナイト。落ち着け」

今にでも飛び出しそうなナイトを歌怨がナイトの影を踏み付けた。

マロト

「まあまあ。そこまですて行くのでしょうか。」

明日の朝までには国の方まで届けなければ行けない訳だからなあ」

と言い、歩き始めた。

何故か私達三忍が前に行く事となり、真ん中には舟橋さん。

その後ろにはマコト先生が着いていた。

ナイト

「ボソ」何だよ。船橋って人。まるで俺ら忍びを馬鹿にしてるみてーじゃんかよ」

歌怨

「そう思うのは仕方ない事だ。俺達は俺達。船橋さんは船橋さん。思考能力は人それぞれだ」

ナイト

「何だよそれ…天野はどう思う？」

璃南

「んー…確かに人それぞれっていうか…」

ナイト

「お前も歌怨の方がよ…つまんねえーの」

歌怨

「任務に集中したらどうだ？」

ナイト

「やんのか？」

璃南

「はいはい…！終わり…！…！任務中に喧嘩してどつするの…！…！」

船橋

「溜息」

マコト

「呆」

璃南

「ボソ）（微妙に船橋さんにも舐められちゃってるし…！」

ナイト

「ボソ）（アイツのあの顔、気に入わねえー」

璃南

「だからって殺しちゃ駄目だよ!!」

ナイト

「これも任務。殺しちゃ意味が無くなるだろ」

貴方は何が目的なの？と私は聞こうとしたけど聞かない事にした。

進む事、数時間。

只今・昼食準備。

私と船橋さん以外、岩だらけの片隅で昼食の準備中。

私は主に魚とかを吊るしてる訳なんだけど…

まず火が無いと出来ない訳だし…私は水と氷なら出せるけども…

あー…どうしよう…と、困ってた時に…

ナイト

「どけよ。じゃないと、火傷するぞ？」

私はすぐさまどくと、口に手をあてて片手で印を結んだ。

<<火遁・火柱の術>>

中火ぐらいの炎でみるみるうちに火が大きくなって行った。

璃南

「あつ、、ありがとう。後は…塩とかか…」

ナイト

「塩なら…確か…」

マコト

「ほら。塩だ」

手で受け取るよりも先に水が受け止めては私の手の上に載せてくれた。

歌怨

「…今は…」

璃南

「ああ。今の水の事？」

ナイト

「すげーなww」

璃南

「ありがとう／＼これはお母さん達の形見というか…私を守ってく
れるようにしてくれたの」

マコト

「成程…つまりは無傷という事になるのか…」

璃南

「はい」

後編に行きます

003*初めての任務はBランク!!? †中編†

マコト

「そういう人がチームにいてくれると楽しいな」

璃南

「ありがとうございます」

とまあ焼けた魚を食べながら作戦を練っていた。

いつ、敵に襲われても可笑しく無いように…という事らしいの。

ナイト

「そういえば…どこに届けんの?」

マコト

「雷の国・雲隠れの里だ。そこには沢山と言っても良い程に忍びがいる。」

火影様から聞いた話では狙われている…という事でしたが…」

船橋

「……………そこまで聞いていたんじゃない……………」

(ここからは波の里と似るかもしれない……)

歌怨

「どつという事ですか？」

船橋

「イチガコーポレクション…ガトー海運会社並の金持ち会社の奴ら
なんじゃが…」

つい最近、わしが持つペンダントを狙っておるんじゃないよ…
それがこのペンダントじゃよ」

ナイト

「何だこれ…紫色で光ってて逆に眩しい」

船橋

「だが…話によれば、ある一定の人物にしか効果が発揮しない…らしいんじゃない」

璃南

「一定の人物？…とは？？」

船橋

「それは…おm（）キイイイインッ」

歌怨が食べようとしていた魚に手裏剣が刺さっていた。

毒入りの手裏剣だったのか…魚がすぐ黒くなった。

船橋さんは急いでペンダントを隠すけど、手裏剣を連発で投げつけられるのも、私は船橋さんを庇い、その上から水が守ってくれていた。

ナイト

「何なんだよ…てか何気に無傷だし」

璃南

「それが、水の能力なんだもん…」

歌怨

「来るぞ」

今度は炎で焼かれそうになったが氷が大きな盾となって私達五人を助けてくれた。

???

「チツ。早く死ねよ」

マコト

「大丈夫か…」

璃南

「何とか…」

ナイト

「天野の氷で何とか助かった」

歌怨

「まさか敵がさっきの船橋さんの話を盗み聞きしてたのか??」

マロト

「その通りだな。すぐにここから出発するぞ」

何とか脱出し、早足で向かっている途中。

璃南

「（やっぱりBランクは難しいね…いつ、どこから敵に襲われるか分からない訳だし…）」

マロト

「……………」

歌怨

「……………」

ナイト

「……………」

船橋

「……………」

その後、重苦しい空気の中、私達は進んだ。

だけど…行く先も…さっきから同じ道を通っている気がする…。

マコト

「嵌められたな…」

歌怨

<<写輪眼>>

マコト

「写輪眼か…どうだ？分かった事は？？」

歌怨

「……………多分…幻術だ。」

「けどこの幻術は写輪眼では見切れない」

ナイト

「どつという事だよッ！……！」

船橋

「……」

璃南

<<劉冬眼>>

マコト

「（劉冬眼……やっぱり十尾の少女だな……）」

璃南

「……50M先、出口ある。
少し行った先には敵がざっと7人」

マコト

「よし。歌怨、ナイト。戦いの準備をしておけ。
そして璃南。そのまま劉冬眼を使っつけていってくれ。
いつ敵が襲ってくるかが分かんない訳だ。
それと船橋さんの近くにいて、守るんだ」

璃南

「はい!」

ナイト

「殺しても良いんだよな？」

マコト

「・・・まあ良いだろう」

歌怨

「そんな事を聞いたとしても最初から手加減無しで行こうとしていただろ」

ナイト

「ケツ。まあそんな所だな」

璃南

「…敵、続出」

マコト

「行くぞ」

走り出すのは良いけど…船橋さんがすごく辛そう。

璃南

「後10M」

三忍はクナイを用意し、先に走って行く。

少し先からは戦う音がトンネルのそこまで響き渡っている。

数分して…マコト先生がやって来た。

マコト

「こっちは終了だ。どうだ？」

璃南

「……敵は雷の国周辺にいます。
今は何とか大丈夫だと思います」

マコト

「そうか。船橋さんもご無事ですか？」

船橋

「ああ。大丈夫じゃ」

ナイト

「…………マコト先生。
もう少し進むのか？」

マコト

「まだ昼間だが……ここら辺で野宿とするか。
お前達もさっきの戦いで術の使いすぎで疲れているだろう。」

歌怨

「ああ。傷も結構付けられたしな……」

船橋

「だがここら辺で野宿して襲われるじやろっ……」

マコト

「安心して下さい。こちらも幻術で寝場所を隠します。」

そっとうとマコト先生がテントを作り、幻術で見事に隠した。

ナイト

「あー……痛ってー……」

バッグを置くと、治療中のナイトの所に向かった。

璃南

「やるよ 絆創膏とか、貸して」

ナイト

「……ん」

消毒中…大人しく静かにしてくれてやりやすかった。

璃南

「はい。後は絆創膏を上から張るだけだね」

冷たい冷たい氷で冷やした絆創膏を張ったら絶叫した。

ナイト

「貴様ツ（泣）俺が炎の属性だという事を知ってて…ひでえ（泣）」

璃南

「だってね、今の毒針があっただよ？

まあ私が医療忍術を使わなくとも何とか戻ったけどさ」

ナイト

「天野ってさ…結構Sだったりして」

璃南

「ナイト（怒）もっと氷で冷やそうか？」

ナイト

「あー！今…」（ナイトって…／／／）

璃南

「ん？？何？？」

ナイト

「何でも無い。」

馬鹿話をしてたら行き成り（ボタンッ）という音がした。

マコト

「おい！！歌怨！！どうした！！」

船橋

「腕が黒くなってるわい…」

マコト

「大変だ…毒が体に回ってるぞ…」

璃南

「マコト先生！！ここにのせてください！！！！医療しますので！！！！」

マコト

「出来るのか！？」

璃南

「任せて下さい これでも私は死者を甦らせれ増したし、」

そういつと先生が歌怨を私の前に運んだ。

そのまま左腕にチャクラを集中させた。

私の気持ちに反応したのか…氷が歌怨の額近くに執着し始めた。

マコト

「助かるのか…??」

璃南

「はい。今の所、毒は少しずつだけど収まっています。

それに氷で頭を冷やしてるから早くすれば明日の朝までには治るはず…」

ナイト

「お前、いろんな意味ですげえーなWWW」

璃南

「あ、ありがとうございます」

ナイト

「素直に喜べよ」

璃南

「いやーWWW”いろんな意味で”ってどんな意味?って思って…」

「

ナイト

「天然だな(笑)」

璃南

「ちょっと笑わないでよー（泣）」

ナイト

「だつてなーwww」

そんなやりとりをマコト先生が呆れ顔で見ている共知らずに私達は楽しんでいた。

004*初めての任務はBランク!?!? †後編† (前書き)

雪の国・雲隠れの里まで無事に船橋さんを届ける事になった私達。

忍術学校を出て間もないのに初日からBランクという上忍・中忍レベルの長難関任務でもあった。

そんな矢先に・・・イチガコーポレクションの忍びだと思われる奴らに狙われた。

そして、無事ナイト・歌怨・マコト先生のおかげでもあって私達は何とか脱走したものの、森の中で歌怨が倒れた。

医療忍者でもある私は7人で十分そうなテントで歌怨を治す事に。

そしてマコト先生の幻術で私達は一晚無事に過ごせれる者…

004*初めての任務はBランク!?!? †後編†

ナイト

「歌怨・・・治ってるか？」

璃南

「もつじき・・・日も暮れるし治るよ」

ナイト

「へへっ・・・そうか」

璃南

「休まないの？」

ナイト

「同じスリーマンセルの奴が倒れてんに休めれるかよ」

璃南

「・・・優しいね」

ナイト

「そうか？」

璃南

「つい最近まで私達は喋っていなかったのにね……」

マコト

「そうだな」

2人

「!!!？」

マコト

「だが。その経験はこの第11班の戦力にもなるの、知ってたか？」

ナイト

「どついう事だよ……」

マコト

「簡単な話だ。劉冬眼を使う璃南に、写輪眼を使い、雷を身に纏う歌怨に、片手で印を結び、血継限界でもあるナイト。俺達4人が力を合わせれば出来ない事は無い」

ナイト

「たまにはカッコイイ事を言っね」

璃南

「流石は上忍・・・だね」

その時だった。

歌怨が頭を抑えながら起きだした。

歌怨

「1111は・・・??」

璃南

「起きたー!!!」(抱きつく)

私はすごく嬉しくて思わず抱きついた。

歌怨

「何だ???」

ナイト

「璃南の奴。一晩お前に付きっ切りで看病をしてたんだぜ(ニカッ)」

船橋

「なんじゃなんじゃ。騒がしいのおー」

マコト

「船橋さん。歌怨が復帰しました。
これで出発出来ます」

歌怨

「璃南、すまなかったな」

璃南

「うっん。私達同じスリーマンセルでしょ」

ナイト

「だな」

ナイトが拳を作りながら前に出した。

ナイト

「お前らもやれよ（ニカ）」

歌怨もやった所で私もやった。

マコト

「おつ。俺も混ぜろ。船橋さんもやりましょう!」

船橋

「あ、ああ」

マコト

「よし。この絆に誓って…絶対船橋さんを無事に送り届けるぞ!!」

「ああ!! / はい!!」

そして・・・

私達は雪が積もる中、敵に見つからないのかと心配な気持ちを抑えながら歩いた。

船橋

「あそこじゃー！ー！雪の国はー！ー！」

ナイト

「おっじゃー！ー！ー！（小声）」

マロテ

「お前達。気をつけて繋れよ」

「「はい／あぁ」」

《劉冬眼》

さっきからどうも嫌な予感しかしないんだよね……。

璃南

「マコト先生！…トラップが…」

するとナイトとマコト先生がクナイを出した。

ナイト

「だろっな。めんどくせー」

???

「はっはっは。流石は忍者じゃ」

歌怨

「この声は…!?」

船橋

「…イチガじゃ…!」

ナイト

「おい…! 糞じじい…! 隠れてねえーでさっさと出てきやがれ」

???

「糞じじいじゃと?」

そう言った途端、雪の中から10忍ほどの中忍だと思われる忍者が出て来た。

その後、白ひげのおじさんが後ろから現れた。

イチガ

「おつおつ。怯えてるのー」

ナイト

「勝手に言ってる。糞じじい」

イチガ

「ガキが。今の内にほざいてる」

キャラがー!!!

ナイト

「悪いけど俺ら任務中でな」

マコト

「どうやら中忍が10人・・・という所だな。お前たち、いけるか？」

歌怨

「行けるかもな。璃南は余り舟橋さんから離れるな」

璃南

「了解」

そしてイチガという人が腕を下ろした時、忍者達が一気にやって来た。

ただど歌怨・ナイト・マコト先生達にそれぞれ三忍の忍者がいて、こっちは4忍もいる。

殴ろうとしても交互に氷と水が盾となって船橋さんと私を守っていた。

2

「何だこれは!!!!」

璃南

「船橋さん!!絶対私から離れないで下さい!!」

船橋

「ああ。。」

璃南

「ありがとうございます、水遁・簾縛水!!!!」

すると雪の中から水が出て来ては4忍の忍者を捕らえ始めた。

璃南

「悪いけど・・・はあっつ！！！！！！！」

そういうと、四人の忍者らは血まみれとなって消えた。

船橋（啞然）

璃南

「船橋さん、すみません……
貴方を守る為なので……」

するとマコト先生も歌怨もナイトも中忍レベルの忍者達を倒した。

船橋

「イチガ！！何故わしを狙うんじゃ！！！！」

イチガ

「何故だど？それはお前が憎いからだ（）（）ドサッ」

その途中、マコト先生がとどめを差した。

マコト

「憎い……か。」

歌怨

「終わった、のか？」

ナイト

「ヤッファー！！！！」

船橋

「終わった、ゝゝんじゃなー！！！！」

マコト

「ああ。お前達もよく頑張ったな。中忍にあそこまで刃向かうとはなー……」

璃南

「はい」

ナイト

「どうなるかと思ったぜ」

歌怨

「最終的には船橋さんが無事でなによりだ」

マコト

「よし。船橋さんを無事に送り届けるぞ……！」

「そして……帰り道・船橋さんを無事に送り届け……」

歌怨

「どうなるかと思ったが……無事に終わったな」

ナイト

「だな」

マコト

「にしてもお前達は強いな。今の所、順調に成長しているのはー…
璃南だな」

璃南

「やったー!!! ナイトより成長してる」

ナイト

「ええ!! 俺じゃないのかよっー!?!」

マコト

「璃南だな。歌怨が次だな」

歌怨

「フンッ」

ナイト

「何でー!!! (ガビーン)」

「アハハハハハハ!!!」

雪の積もる道のりで…私達の笑い声がこの雷の国で響渡っていた。

005* 我愛羅!!? (前書き)

初めての任務が終わり、今度は修行に励む三忍は・・・

005* 我愛羅!!?

マコト

「マスターが早いな。それに三忍とも、体術・幻術・忍術もきちんと上昇してるな」

ナイト

「絶対負けられないしな」

あれから…Bランクの任務が終わって数週間。

私達はいろんな任務をこなして来た。

時にはCランクもやったり…Dランクもやったり…Bランクはもう一度やって…一日に2回ぐらいは任務に出かけたまでだった。

そして…私達は腕を挙げる為”幻術・体術・忍術”の特訓をしている。

マコト

「初日に比べて良く腕を上げてるな」

ナイト
「おっしー！」

歌怨
「まだまだ行けるな」

璃南
「うん」

マコト（あれは…もうこんな時期か…）
「あー、悪いが俺は用が出来た。てことで解散」

そついい、マコト先生はどこに行っちゃった…

璃南
「ねえ、木の葉でも回らない??
ついでにお餅とか食べたり」

ナイト
「いいかもな 修行後の餅はサイコだ」

歌怨
「悪いが俺はm（）」「歌怨がないとスリーマンセルの意味が無い

でしょー」「ちよ
」

私は二人の腕を掴んで歩きだした。

璃南

「あっ！！あそこのお餅屋さんなんてどうっ？？」

ナイト

「おっ！！行くっぜ」

歌怨

「おい………」

看板に誘われて角を曲がった時、足が止まった。

サスケ

「へえ〜砂漠の我愛羅ね〜」

我愛羅

「俺達は行く………！！？」

ナイト

「何だアイツら???あの額当てからして砂の奴らだよな」

歌怨

「ああ」

璃南

「ナルトく、何してるの???」

私は歩きながらナルトの名を口にした。

サクラ

「あつ、璃南!!ちょっと聞いてよ……」

ナルト

「璃南姉ちゃん……」

木の葉丸

「ナルト兄ちゃん……弱すぎるぞ!!コレ!!」

璃南

「ちよつと一人ずつ言ってよ……」

そう言った時だった。

冷たい視線に気付いて、そっちの方を見ると我愛羅が私を見ていた。

サクラから事情を聞いて、私は三忍に向き直った。

璃南

「木の葉丸君がぶつかった事は謝ります。ただ……中忍試験前に殺すようなそんな真似をすれば確実に貴方達は一生下忍のまま。だから大人しくこの場から離れて下さい」

テマリ

「……………」

カンクロウ（良い奴じゃん……／＼／＼）

我愛羅

「……………ああ。そのつもりだ。悪かったな。……璃南」

そついうと我愛羅達は消え去った。

だけど…どうして我愛羅は最後に私の名前を…口にしたのッ！…！

あの時…我愛羅は…

ナルト

「璃南姉ちゃん・中忍試験って何だっばよ????」

璃南

「下忍から中忍に上がるテストのような者だよ。もう少ししたら中忍試験が行われるの。」

それで各里から中忍候補の者がこの木の葉にやってくるの」

ナイト

「だけど何で璃南が知ってたんだ??」

歌怨

「この間、マコト先生が言ってただろ」

ナイト

「そうだったけ？」

璃南

「その時、ナイト負傷で聞いてなかったただけだと思おうww」

ナイト

「何だソレ」

「時は過ぎて…中忍試験当日」

ナルト達も中忍試験に出る事となり、私も張り切っていた。

(すみません…璃南 莉奈に変更です)

莉奈

「ナルトー、私先行ってるー」

ナルト

「了解だつてばよ」

印を結ぶと、風と共に消えた。

006* 第一回目のテストは筆記!!!? (前書き)

- 何とか中忍試験の志願書を出す為に忍術学校に入った者の・・・

006*第一回目のテストは筆記!!!?

莉奈

「始まるね〜。確か301だっけ」

ナイト

「おう。・・・って何やってんだ？アイツら」

歌怨

「・・・ただの幻術に過ぎない。先に行くぞ」

莉奈

「了解。ナイト〜、行くよ〜」

ナイト

「あつ、おい待てよ!!!」

私達は幻術で止まってる候補者達を見て、何も無かったように上の階に上る。

中忍試験の本会場でもある301号室前にマコト先生が出迎えてくれた。

莉奈

「あつ。マコト先生」

マコト

「ほう。上忍の幻術を見破ってここまで来たんだな。関心関心。流石は俺の教え子だ」

ナイト

「んで。先生は何をしに来たんだ??」

マコト

「志願書を持って来たな。それを貰いに来たんだ」

志願書を渡すと先生は微笑ましい笑顔を見せながら私達を送りだした。

中に入った途端・・・沢山の視線を浴びた。

莉奈

「無視（）前の方に座ろうよ。うん。決まり」

どうせ何かを言われる前に私は二人の腕を掴んで中間ぐらいの席に

座った。

莉奈

「……………やっぱり他の席にs()」「何だよ!!お前!!!!酷いじゃん!!!!」「何でいんの。。。」「

皆さん。お分かりでしょうか。最後の”じゃん”で。

砂の三忍組がいたコトに気付かなかった私…。

だけど*カ*我*テ*って感じたから良いんだけどさ…隣が我愛羅じゃないからさ…

こう見えても私。まだ我愛羅が少しだけ好き…だけど、認めたくない自分もいるというか…

歌怨

「まア良いだろう。もう席は空いて無いようだしな」

という事で*歌*ナ*莉*カ…という順番に。

はア……。今日は付いてないかも

そしてさっきから溜息連発中。

カンクロウ

「お前・・・さっきから酷いじゃん？」

莉奈

「人生山アリ谷アリとかよく言うでしょ？それと同じ」

ナと歌（出たよ。莉奈の嘘作戦）

通用すると思ってたけど逆効果だった。

反対に頬被抓られた。

莉奈

「はなひえ！！！ばひゃばひゃ！！！！（離せ！！！！馬鹿馬鹿！！！！）」

「

！！IN4分後！！

莉奈

「痛っーい(泣)何すんのさー!?!」

カンクロウ

「こっちは傷ついてるじゃん」

莉奈

「知らないよ。そんなの」

私は両頬を両手で抑えながら涙堪えていた。

ナイト

「大丈夫か?」

莉奈

「大丈夫じゃない。場所変わって」

ナイト

「はっ!?!」

そっという事で私とナイトが入れ替わり…カンクロウとテマリが入れ替わった…何故に!?!

テマリ

(結構良い男が二人もいるじゃない／＼)

ナイト

(女って莉奈以外皆同じだ)

案外可哀想なナイトだったけど・・・その途中ナルトの大声によって我に帰った私

これから先の事を考えすぎて自分の世界に入ってた私WWW

ナルト

「俺の名はつずまきナルトだッ！！！！いずれ火影の名を受け継ぐ男だってばよ！！！！」

莉奈

「ボン(あの馬鹿。一気に敵が増えちゃってるよ……ナルトラしくて良いけどね)(えw」

歌怨

「だな」

〓IN数分後〓

サスケ

「ついでに天野莉奈についても調べてくれ」

カブト

「ああ。……彼女のチームには音殺歌怨に闇月ナイト。司令官の雨野マコト。」

今分かるのはそれだけだ。全てが不明になってるよ」

ナルト

「流石は莉奈姉ちゃんだったよ」

それから…第一回目の筆記テストが始まった。

莉（暗号…こっなるんだね…）

と、真剣にやっているとと思うけど…集中出来ない。

隣が隣だから

隣はなんと………カンクロウなんだよね……。

ますますついてない私。

だけど斜め前には我愛羅がいてその前にはナイト。

私の斜め後ろ左には歌怨とテマリが座っている。

確かカンニングをすれば、失格か持ち点から引かれる…。

だけどこんな問題、ナイトはほぼ解けないはず。

この間《筆記テストはお断りッ！！》とか言ってたし…それだったらナルトも解けないはず。

どうにかしてでも私達三忍の持ち点を減らさせない方法…。

《忍者は裏の裏を読むべし》

裏の裏って何！？

裏…裏…

《忍者らしく》

忍者…

《裏の裏を読む》

…成程。そういう事ね。

《劉冬眼》

『ナイト。歌怨』

ナ『何やってんだよ(汗)』

歌『忍者は裏の裏を読むべし。だろ?』

莉『そういう事。私が答えを言うから。書いて』

ナ『流石は莉奈だな』

歌『頼む』

莉『了解。まず一問目はー…』

そうして…

ナ『解けた！！サンキュー、莉奈。歌怨』

歌『礼なら莉奈にするべきだ。何とんでもこの試験は突破するぞ』

莉『了解』

ナ『勿論だ』

そして無事、第一試験・筆記テストも無事に終わり第二試験管の後に着く私達。

《死の森・前》

ナルト
「すげー・・・」

アッコ

「ここは通称・死の森よ。第二試験はこの森で五日間を過ごすわ。うわ。」

その目的は天地両方の巻物を灯台に三忍で持ってくるのよ」

そして一旦解散となり、、、次の日。

歌怨

「早いな。誰が持つか？」

莉奈

「ここは…意外性No.1のナイトにする？」

ナイト

「はい？」

歌怨

「良いかもな。巻物を頼むな」

ナイト

「おい！！ちよい待てよ！！」

と、私達はそのまま巻物を買いに行った。

ナイト《成程。そういう事か》

莉奈

「あつ、今の所空いてるのは44番だね」

ナイト

「マジで巻物誰か持てよ」

歌怨

「無視）（急ごう」

ナイト

「無視すんな（怒」

莉奈

「まあまあ（笑）ナイトが持ってたほうがこっちとしてはすぐく助かるよ。（本当は私が持つてるけどね）」

「開始」

歌怨

「とりあえず、灯台に近い場所に向かうぞ」

二人

「ラジャー」

移動中、私が何かの気配に気がついた。

《誰かいるよ。後ろから来るよ》

《変わり身だな》

【変わり身の術】

私達は樹木を超えるとその影に隠れた。

影使いでもある歌怨が幻術で見破られないようにしてくれたんだ。

そして私達の分身が誰かに襲われた。そしてクナイで殺された…が…

((ボオオオオンツ

男

「チツ。どこに逃げやがったー!!!」

ナイト

「ひでえーやり方だなー」

男2

「チツ。地の巻物を持ってんのかぁ!？」

莉奈

「持っていない…って言ったらどつするの?」

男3

「殺すまでだツー!!!」

「飛ばして…:灯台」

上忍

「ただいまのタイム…10分25秒29…です」

歌怨

「案外早く終わったな」

ナイト

「だな」

上忍

「天と地の巻物。両方持つてるな。後は好きにしてもいいぞ。第三試験会場にも向かってるも宜しい」

莉奈

「いえ。弟達の手伝いに行きます」

ナイト

「何なんだよ!!毎回毎回!!待ってくれよ!!」

とかいいつつも先に行くナイトって……

007*大蛇丸、現る!!!?(前書き)

早くも天地両方の巻物を、獲得し灯台に急ぐ莉奈達。

一番のりで10分25秒29という在り得ないタイムで第二試験を
終わらせた。

そして、ナルト達の上に急ぐ三忍であった。

007*大蛇丸、現る!!!?

莉奈*（何なの・・・さつきからこの嫌な気配は・・・）

ナイト

「おい莉奈。どうしたんだよ。そんなに急いで・・・」

歌怨

「何かあったのか？」

莉奈

「分からない・・・でも嫌な予感がするの・・・」

【劉冬眼】

サクラ

『サスケ君!!!しっかり!!!』

これは・・・？

莉奈

「音隠れ？・・・違う。あの人じゃない・・・じゃあ誰？」

???

『サスケ君は必ず私を必要とするわ』

莉奈

「・・・まさか・・・」

だけど・・・アンコさんが確か・・・確認したはず。

アイツが・・・大蛇丸がいるはずは無い・・・。

歌怨

「どつだ？」

莉奈

「もしかしたら、、大蛇丸がこの試験・・・いや・・・この死の森にいる!!!」

ナイト

「はあっ!?!」

莉奈

「サスケに呪印が付けられた。急ぐしか無いよ。もしかしたらあの呪印が暴走しかねないよ!!!」

歌怨

「ああ。急ぐぞ」

ナイト

「糞・・・」

莉奈

「私さ。こういつ時の為に新技を考えたの！」

ナイト

「新技？」

莉奈

「名付けて。超高速なんだよ。ちなみに私の忍法」

歌怨

「試す価値はありそうだな」

莉奈

「行くよ。莉奈忍法・桜蘭走權！！」

すると、三忍の足元が風のように速く走れるようになった。

まるで逃げ足が速い鷲のようにな。

ナイト

「おっ！！見えて来たぞ！！！！」

莉奈

「あっ！！あれって音隠れの奴らじゃん！！！！」

私は速度を上げて、リーさんがやられそうになった時、痩せ細った奴を蹴り飛ばした。

サクラ

「り・・莉奈っ！！！！」

ナイト

「お前さー…弱すぎだろ？」

莉奈

「ちょっとナイト！！！！サクラだって頑張ったんだからそういふ事

を言っちゃ駄目でしょ」

ナイト

「お前もそう思わねえーか？」

歌怨

「ただ単にお前が馬鹿で強いだだけだ。」

莉奈

「歌怨に一票！！」

ナイト

「うわっ。ひっでー」

サクラ

「・・・私だつて・・・」

ナイト

「・・・まあお前もアイツらの為にも頑張ったんじゃないの。
そこまでして、守りたかった。そこは認めてやるよ」

莉奈

「素直じゃないね」

ナイト

「うるせえーよ」

サクラ

「／／／／／／／／／／」

歌怨

「それより、敵を怒らせてるみたいだぞ」

ザク

「糞女め・・・俺を蹴り飛ばしやがって・・・」

莉奈

「あつ、私？」

キン

「何なのよ!?!」

莉奈

「普通の木の葉の忍びだけど？」

ナイト

「噛み合ってねえーよ!?!」

莉奈

「そう? まあーいいや。私、三人の医療するから後はよろしく」

歌怨

「まあ良いだろう」

ドス

「キン！！あの女を捕らえろ！！」

キンという人が高速で向かったらしいけどナイトが片足で蹴り上げ、見事に樹木にぶつかった。

ナイト

「ここから先は行かせねーぞ」

歌怨

「まあ行かない方が身の為かもな」

ドス

「・・・2VS3。これじゃー、そっちが不利だな」

歌怨

「力ではどつやらどつちが上だな」

莉奈

「サクラも治療するから横になって」

サクラ

「いいの???行かなくて・・・」

莉奈

「大丈夫。あの二人は強いよ。あの二人なら・・・」

【影分身の術】

莉奈

「よし。これで三人に分ければすぐ治るよ」

サクラ

「私って・・・本当に弱いね・・・」

莉奈

「そんな事無い。サクラは・・・強いよ。」

サクラ

「だって・・・大蛇丸にだって・・・」

莉奈

「ナイトが言ってた”弱い”はね・・・サクラがグジグジしてるからだと思っの。」

人にばっかり頼って、いつかはその人達も倒れて最終的には死ぬ。

力無い者は殺され、力ある者は上に立って行く。

だけど、サクラはリーさんが倒れて、ナルトもサスケも負傷で・・・サクラは命賭けで二人を守った。

良い事だと思っよ。ナイトだって”そこは認めてやる”って言うてくれたでしょ？

だから自分を信じて。必ずその願いは叶うから」

サクラ

「・・・うんっ・・・ありがと・・・」

だけど、二人が心配。

歌怨

「雷遁・豪電柱！！！！」

すると上からいくつもの稲妻がドスとキンの体にめがけた。

キン

「ゲホッ・・・」

ナイト

「チツ。足が速えー奴だぜ」

ザクという人がナイトの周りを風のように走りながら音波を撒き散らしていた。

ナイト

「糞つぜえー。てか何だよ。この音波」

莉奈

「ナイト！！！！タイミングを計って火遁を使って！！！！」

ナイト

「・・・了解。」

ナイト（１・２・３）

「火遁・炎導豪炎の術！！！！！！」

すると、一気に炎がザクという人に飛び散った。

莉奈

「よし」

その時だった。サスケに掛かってた呪印が・・・発動した。

「「キヤー！！！！！！」」

思わず、吹き飛ばされそうになる私とサクラ。

それに、ナルトも苦しそうにもがき始めた。

私はナルトの元に急ぎ、抱き抱えて木の上に行った。

莉奈

「ナルト！ナルト！！しっかり！！」

ナイト

「完璧に気絶してやる」

歌怨

「どつする。このままだと、サスケはアイツらを倒しかねないぞ」

莉奈

「だけど、サスケを止める事が出来るのは・・・」

「…ナルト…と…」

ナイト

「けどどうすんだよ!!コイツ(ナルト)は気絶してんだぞ!!」

歌怨

「…どうにも…!!!!」

その時だった。

サクラがサスケに抱きついていて。

まだ、治療中でサクラだって立つのがやっとのはず…なのにサクラは立って、サスケを止めた…。

その光景を見ていたいのには物凄く嫉妬していた事だろう…w

いの

「サスケ君に泣きながら抱きつくなんて…やるわね^言^」

サクラ

「フンツ。アンタなんかサスケ君は譲らないわよ。言。」

莉奈

「いの！変な事を話しないで切る事に集中しなさいよ！」

いの

「はぁーい…」

サクラ

「(ドヤァ)(」

いの

「(イラッ)(」

サクラ

「(」

今のやりとりは見なかった事にしようかな………

＝IN次の日＝

ナイト

「あー…暇すぎだぜー…」

私たちは確かに早く終わったけど、最後まで上忍の話聞いていなかった為…今日はもう中忍試験合格発表場に行く事となった。

そして今はー…長つたらしい廊下を歩いてる所。

私の頭の中にはナルトの事だらけ…

「無事に地の巻物を取れたかなー…」とか「巻物は開けてないよね???’」とかとかッー!!!

莉奈

「はああー…」

歌怨

「…どうした？」

莉奈

「…何でも無い…」

本会場に入ろうとした時だったー…

前から我愛羅達が通って来た。

通って来た…というより、通ろうとしていた。

だけど私を見る我愛羅の目が本当に冷たかった…。

その場を我愛羅が通り過ぎて行った。

(やっぱり私なんか…綺麗さっぱりに忘れちゃったのかな…それなら、あの日…マコト先生との修行が終わって三人でお餅を食べに行こうとして、再開したあの日…我愛羅は確かに小声だったかも知れないけどちゃんと「莉奈」「って…じゃあ…なんで…」)

ナイト

「まあーいいや。行くうぜ」

中に入るなり…途端に声が鳴り響いた。

???

「か〜お〜ん〜くん〜!!!」() () (抱き付く)

???

「ナイト君ー!!! 逢いたかったよー!!!」

ナイト

「火遁・鍾艶聞の術!!!!」

解説!!!

火遁・鍾艶聞すいえんぶんの術は:

霞炎舞の術と似て、印を組み、口から霧状の物質を吐いて(砂とか石?) 相手を攻撃する。

ナイトお得意の鍾艶聞の術で二人がもつとも嫌がっている鈴鹿達を蹴散らした。

???

「何するのよっー!!!」

こっちは狐目鈴鹿。(きつねめ・すずか)

歌怨が大・大・大好きな取巻きの一人。

実力は忍術学校時・ナルトよりも下だった。() (今回、生きてる事が奇跡:ww)

???

「でもそんな所がかっこいい〜!!!」

そして駁^{まだらめ・ゆづか} 結羽袈

ナイトが世界一で好きだという…

紹介は…これぐらいかな？w

(名前)

「それじゃー…邪魔者は消えるね」

満面の笑みをしながら、私は二人をおいて窓から飛び降りた。
(下
はコンクリート!!!))

ナイト

「キメえーんだよッ!!!近づくな!!!ブスッ!!!」

結羽袈

「ええ〜!!! (涙目)

そんな酷い事を言わないでよっー!!!」

「IN 莉奈は」

莉奈

「んー!!!風が気持ちいい!!!」

私はこの灯台の屋上に来ていた。

確かに二人の邪魔はしない方が良さそうだったし…我愛羅の事でも少し考えたかったし…。

『我愛羅ッ』

『なあに?』

『大好きッ』

『チュッ()』

『// // // //』

今でも甦るあの昔の頃の光景…

（ ）

莉奈（本当、陰が薄いんだからー…）

「そついえば…我愛羅とどんな関係？」

カンクロウ

「兄弟」

莉奈

「はあっ！！？兄弟！！！！？似てなッ！！！！」

カンクロウ

「似てないとか言われると傷つくじゃん？」

莉奈

「大丈夫b カンクトロウは心の広い人だからww」

カンクロウ

「…（ブチッ。

カラス^言^」

莉奈

「あー!! (汗)
ごめんなさいー!!!!」

カンクロウ

「////////」

莉奈

「私の顔に何か付いてるの？」

カンクロウ

「(鈍感…じゃん…////////)」

そんなカンクロウの行動が気になりつつも、逢えて無かったかのように見過ごした私。

放送

『第二試験終了致しましたので、お集まり下さい』

莉奈

「もう…?…まあ第三試験も頑張ろッ」

私が走り出そうとした時だった。

「あのさー…」振り返ると顔を真っ赤にしながら、呼び止めていた。

カンクロウ

「その…第三試験…頑張ろう…みたいな…／＼／＼／」

莉奈

「…うん！じゃあー、後でね^^」

その後のカンクロウはというと…。

カンクロウ

（俺の馬鹿ッ！！アホ！！！！何やってちゃってんだよー！！！！）

と、自分の頭を叩いていた。

莉奈

「到着」

???

「莉奈姉ちゃん！！」

と、言いながら誰かが抱きついて来た。

莉奈

「ナルトー・第二試験、クリアしたんだね^^」

ナルト

「その通りっー！！姉ちゃんが最初？」

莉奈

「うん^^一日目に終わったよ」

サクラ

「ええー！！私達なんかついさっきだよ（哀）」

莉奈

「そうなんだwでも、それだけ巻物取りに時間が掛かったんだね・
・w」

その時、私は何かを察知した。

誰かが私を見ている…。

でも、誰が？

この冷たい目つき…覚えてる…まさか…

トントン

莉奈

「!?!?!」

マコト

「どうした？莉奈？そんな顔をして」

莉奈

「マコト先生…」

マコト

「??.?」

莉奈

「何でも無いです…」

* 0 0 8 * 幻覚

莉菜

「きつと何かの幻覚…うん…幻覚だっ！」

と、私は蹲って呪いの呪文のように唱えていた。

ナイト

「はぁ？何が幻覚なんだ？」

莉菜

「あー…もうー…最近、目が可笑しいよー（泣）」

ナイト

「はぁ？」

と、ナイトは何がなんだかさっぱり分からない様子だった。

莉菜

「もう駄目！頭が回らない！」

と、嘆いていた時、冷たい視線が向けられてる事に気付いた。

視線の先を見ると、腕を組みながら壁に寄り掛かりこちらを見る我愛羅がいた。

莉菜

「あー！！（泣）我愛羅とだけは戦いたくない…」

歌怨

「きつと当たるだろう」

と、地獄耳でもある歌怨が即答で言い返して来た。

莉菜

「100%?」

歌怨

「100%」

莉菜

「だから即答しないでよー（泣）」

ムソト

「莉菜。大丈夫だ。お前なら、出来る。そうだろ？」

ナイト

「おい…マコト。ちいっとズレてるぞ（呆）」

歌怨

「ナイトに同感だ」

マコト

「まあ…お前なら、きっと中忍になれる。大丈夫だ。自分に自信を持つんだ。

何たって俺の教え子だろ？この俺がついてる限り、お前達は絶対に中忍になれる」

と、言ってまさかこの言葉が本当に現実となって、証明されるとは誰もが思わなかっただろう…。

そして一回戦目はサスケの勝ちで勝負は次第に進み、9回戦目に突入した。

九回戦目、ナルト対キバの戦いとなった。

莉菜

「んー…ナルト、だね。勝つの」

リー

「そんなの分からないですよ！！戦ってみないと！！！！」

ナイト

「コイツ（莉菜）の運は良く当たるんだよ。

100%中99？はな。外した事すら、余りねえーから、ナルトの勝ちなんじゃねーの？」

リー

「そんな…」

ヒナタ

「ナルト君…キバ君…」

そして、さっきから嫌な気配がするけど、誰だかはもう百発百中で分かる。

絶対に…この木の葉に、大蛇丸がいる。

だけど他の人達は気付いてない様子…マコト先生や、三代目火影様までも…。

ここは、様子を見るしかないかな…。

(飛ばします><)

残るメンバーは、私と歌怨とナイトと、リーさんとチヨウジ。

それに、我愛羅と音隠れが一人。岩隠れが一人で、草隠れが二人残っていた。

私的には、我愛羅と音隠れの人とだけは戦いたくないかな…。

我愛羅は…流石に、戦えないし…音隠れの方は、ナルトたちを襲った張本人でもあり、見る限り大蛇丸の部下だというね…。

だからといって、岩隠れの人と草隠れの人が弱いとかそういうのじゃないんだよね…。

あれこれと考えてる内に電腦掲示板には名前が映し出された。

途端には大声で叫びそうにもなった程だった。

【アマノ・リナVSサタケ・ユウ】

莉菜

「何で!!?」

ナイト

「仕方ねえーだろ。まあ、さっさと行けよ」

マコト

「大丈夫だ。いざとなれば、助けに行くから」

いや、別にそこまで弱くはないかな？

そう思いながら、私は何メートルもある高さから飛び降りた。

着地の際には、少し水が庇ってくれた痛みも和らいだ。

カンクロウ

「お手並み拝見と、行くか」

ナルト

「姉ちゃん!!!頑張れっー!!!」

私が笑顔で応えると共に、審判が笛を鳴らした。

ユウ：「俺はユウ。テメエーを倒して中忍になってやる」

莉菜：「アハハ^^;;;;まあ、私も中忍になりたい訳ですしね…」

と、言うときクナイが飛んできた。が、軽々と水が庇い、クナイを破壊した。

ユウ：「土遁・泥胞子!!」

下忍で土遁を!?!しかも、上忍レベルの!?!?

と、思いながらも水・氷が守り跡形も無く土が負けた。

ユウ

「想定外だな…貴様は血継限界の者か?!」

莉菜

「んー…ちょっと違うかな。私は血継限界なんかじゃないよ。私のチームメイトにならいるけどね^^まあ、今度はこっちからやらせて貰うね」

印を素早く結び、口にした。

莉菜

「沸遁…霧氷獄」

すると一気に私達の周りが、白い霧に包まれた。

きっと二階からはどこに誰がいるのか分かるぐらいに、霧は薄い。

だけど、印を結ぶ事に霧が濃くなっていく。

そして後に、攻めて攻撃をするというのが今回の作戦。

莉菜

「水化の術!!!」

すると、敵の周りに二丁三体の私の水分身が現れた。

相手は気付いてない様子。それどころか、視界が見えなくて困っている様子だった。

莉菜

「水遁・豪水腕の術!!」

一気に腕に水分を集め、それを敵に向けて発射した。

前後左右からも強烈な水を食らい、おまけに視界がゼロで身動きも取れなく、霧を消し去ると相手は気絶していた。

莉菜

「簡単に終わっちゃった(ボソ)」

ハヤテ

「天野莉菜、勝利」

印を組んだ状態で、胸の前に当てると体が水となって消え、その水がマコト先生たちの元に行き、元の姿に戻った。

ナイト

「もっと斬新にやるーぜ？龍駕刀とかさ、使えば良いだろ？」

莉菜

「絶対に駄目だってば！初代水影様が私に託した大事な刀なんだから！！」

ナイト

「んじゃー、いつ使うんだよ」

莉菜

「いつかは必ず使うよ」

そついうと、ナイトに頭を殴られた。

莉菜

「最低ー！！！女の子を殴るなんて！！！」

ナイト

「貰った刀をいつまでも使おうとしねエーからだろーが！！！」

莉菜

「大事な大事な大事な刀なんだよ！？」

歌怨

「五月蠅いぞ。お前ら。そして、ナイト、次だ」

歌怨の言葉に、私とナイトが電腦掲示板を見るとそこには【ナイト VS オダギリ】と書いてあった。

ナイト

「おっしゃー！！暴れられるー！！！！」

オダギリ

「か…フツ」

上では…。

歌怨

「草と、木ノ葉か…。あれは完全に馬鹿にされてるな」

莉菜

「うん。同感。だけどナイトが勝っちゃうと思うんだよね…。(てことはあの額宛は、岩隠れか…)」

マコト

「だな…まあウチのナイトが負けるはずは無いしな（ドヤ）」

つと、何か草隠れの上忍さんに向かってドヤ顔だったような…気がするんだけど…www

ナイト

「火遁・炎爆弾の術!!!」

オダギリ

「甘い甘い!!!」

ナイト

「ちょこまかと動きやがって…」

オダギリ

「付いてこれるか？まあ無理だろうなwww」

ナイト

「それは…どうかな？？」

そう言い、素早い印を結ぶナイト。

莉菜

「ええ???まさかのアレを口寄せしちゃっの!!!?」

ナルトノサクラノリ

「あれ?ノって?ノってなんですか?」

歌怨

「だな…。あのオダギリって言う草隠れの奴は終わるな」

ナイト

「口寄せの術…狼雷暴!!!」

するとナイトの周りには十数足の狼が現れた。

オダギリ

「なんだ…あれは…」

ナイト

「狩りの始まりだッー!!!行け!!!」

闇月忍法・豪華水煙?轟!!!!」

すると十数足の狼たちが一斉に、敵の元に向かい、オダギリって言う人は逃げる隙もなく、狼たちに捕られえられ、ナイトの火遁で決

めた。

ナイト

「見たか！俺の狼たちを！！！」

莉菜

「はいはい。見たよ。早く上って来たら？」

ナイト

「棒読みしやがって！！！」

そんな頃…反対側にいた、我愛羅たちはというと…。

テマリ

「あの男も結構やるじゃないか…」

カンクロウ

「任務の邪魔されたら最悪だけどな。まあ、あの女の力も大抵、見れた事だしな」

我愛羅はただじっと、冷たい眼差しで誰かを見ていた。

その視線の先にはー…。

莉菜

「あそこで負けてれば、一楽のラーメン、14人分奢る約束だったのにな」

ナイト

「んだよそれ！…！ってか俺は見事に、蹴りを付けたじゃんかよ！
！！めんどくさがりでもな！…！」

莉菜

「だからこそだよ…全くもう…確か一楽って一つ、650円だよね
？それを16×650だからー…！」

歌怨

「10400円だな。調度小遣いも無くなるみたいだしな。お前に
取っては持って来いの物じゃないのか？」

ナイト

「ぜってー嫌だ！…！ってか、俺の金が！…！」

カカシ

「ナイト君、奢ってくれるなんて…嬉しいな」

ナイト

「嫌だ!! ぜってー!!!!」

という、他の人たちから見れば楽しそうな会話で羨ましいというの
もあつたかもしれない…。

私は分からなかった…。

どうして我愛羅はあの時…私に…『逃げて』って言ったんだろう…。

そして人が変わったかのように『君は殺さないから』と言ったあの
言葉は…何なの？

それに…どうして再開したあの時、あなたは私の名を口にしたの…
…？

私には分からない…貴方が何を考えてるのかも…

ねえ…昔みたいに笑ってよ…。

お母さんが私たちにくれたあのペンダント…私は大事に今でも、肌

身離さず付けてるよ…

だって、このペンダントは…貴方と私の唯一の繋がりだから…。

009* 我愛羅の戦い(前書き)

途中から莉菜 莉那に変更しました

009* 我愛羅の戦い

続いて…今度は歌怨の番だった。

歌怨は物凄くやる気が無い…というより、早く終わらせようとしていた。

おまけに今から戦う相手の女の子が…すごいオドオドしてるから…すぐ倒されそうだな…うん。

ナイト

「少しは手加減しろよな？」

歌怨

「帰って命取りになるだろ」

そう言っつて歌怨は印を結び、黒い霧とともに下に下りていた。

ナイト

「何が“帰って命取りになる”だよ…!!…こっちは言ってやったのによー」

マコト

「そうだな…って莉菜、何をしているんだ??」

莉菜

「何か…あの子、強い」

私は印を組む状態で目を閉じて、意識を集中させていた。

さっきからあの子の回りに変な物を感じてたんだよね…。

流石は十尾の力+チャクラ…それに、天野一族の力。

こんな事までも出来ちゃうんだね…。

ナイト

「どういう意味で強いんだ?」

莉菜

「…歌怨が手加減したら…殺されるに違いない」

ナイトノマコト

「!?!?!?」

莉菜

「あの子の体の周りに何か変な物が見えたの。
今の”急襲裏紅”という天野一族の術を使って見たの・・・。
そしたらー…あの子の周りには死神がいるの。それも二丁三体だけ
じゃない…」

マコト

「なんだと！???!」

あの子…もしかしたら…樹影家の子かもしれない…。

莉菜

「樹影家…」

ナイト

「樹影？何だそれ？」

莉菜

「話は後。劉冬眼」

続いてナイトも目を閉じて、印を組んだ状態で胸の前に手をやった。

莉菜

『歌怨…歌怨…』

私の言葉に気付いた歌怨が私たちと同じ事をしていた。

それに気付いたナルト達は不審に思い始めた。

莉菜

『歌怨…手加減無しで戦うのを薦める。』

あの子、見かけによらずやばいものを身にまってるよ…!…!…!』

歌怨

『やばいもの…!…!…!…?』

ナイト

『死神らしいぜ。さっき俺が言った言葉、選言撤回だ!…!』

歌怨

『ああ…つまりは手加減をすれば…命取りになる、ということか?』

莉菜

『その通り。あの子は…樹影家の子孫かもしれない。…いや、子孫

に違いない。

昔、天野家と樹影家は対立家でもあったの。ちなみにこれも劉冬眼で見た映像ね。

その当時、天野家と樹影家はどちらの家柄が強いか競い合っていたらしいの。

劉冬眼・龍樺眼りゅうとうがん りゅうかがんを開眼させた天野家は、完全有利だったの。

その成果、完全に敗北に近かった樹影家は家柄のプライドとして…ある恐ろしい計画を考え出したの。それが“死神呪霊”。

死神を召喚させて、相手の懐を付いて命を奪う…必ず息をしなくさせるぐらいに殺し上げる…。

だけど死神呪霊をするには感情を捨てる…という試練があったの。今で言う…霧隠れの“悪習”って奴だね。劉冬眼で見た限り、生徒同士とかでは無く、一家で殺し合いをする事らしいの…そしてあの子は家族である大切な人たちを殺し、死神呪霊を成功させたに違いない」

私が説明し終わると、歌怨は写輪眼を発動させた。

ナイト

「成程…」

莉菜

「この勝負…どうなるかは分からないかも…」

ナルト

「何が分からないんだ?? 莉菜姉ちゃん??」

莉菜

「……この勝負の事だよ。…（ボソ）…死者が出なければ私も嬉しいんだけどね…」

ナルト

「?????」

ナイト

「小声で怖えー事言つなよ（呆）」

ハヤテ

「それでは…勝負を始める!!はじめ!!!!!!」

その言葉と共に敵の樹影家の子孫でもある女の子の目の色が変わった。

そして性格も変わったかのように、人も変わった…。

樹影

「てめー何かひと振りで終わらせてやる!!!!!!」

そう言い、腰から大きな刀を出し、歌怨に向かって振り下ろした。

だけど歌怨は雲分身を作り、いろんな場所に移動しては消えた…。

樹影

「ちよこまかと動く糞八工が!!!」

ナイト

「確かに見かけに寄らず…って奴だな…俺、ああいう奴無理だ^q
^
」

莉菜

「あの歌怨が平然でいられるのも凄い事なんだけどね。。。」

ネジ

「何だ…アイツのチャクラ量は…」

莉菜

「チャクラ???歌怨の事??」

ネジ

「いや…違う…敵の方だ…」

ナイト

「敵???!」

急襲裏紅をまた使う事になりそう……

マコト

「莉菜…頼む！」

そう来ますよね…

莉菜

「急襲裏紅きゅうしゅうりやうこう…!!」

同時に劉冬眼を発動させ…見た物は…

樹影と言う人の周りに…砂が沢山巻かれていた。

どういう事…!!?

莉菜

「…!!?まさか…!!」

私の勘は何となく当たっていた…反対側の所で…我愛羅の瓢箪から砂が漏れ出していた。

きっと我愛羅は砂を使ってあの樹影って人の動きを止めようとしていた。

だけど確か…参戦は駄目なはず…!!

ナイト

「なんだよ?」

莉菜

「ナイト…!!力を貸して…!!」

マコト

「何をする気だ!」

莉菜

「…我愛羅を止めないと…あの子が殺される…!!」

マコト先生は物凄く驚いていた。

それにナイトは一瞬、驚いていたがニヤツと口角を上げて「ああ。良いぜ」と言った。

マコト

「だが…参戦は禁止のはずだ…どうやってやるつもりだ…」

莉菜

「ナイトの忍術で…カモフラージュすれば…私の水は見破られないはずです」

ナイト

「成程。…まあ、任せろ！！闇月一族にしか使えないカモフラージュでアイツ（我愛羅）の砂と戦わせてやるよ（ニヤ）」

莉菜

「勘が鋭いのも良い事だね。私、そこまで言っていないんだけどね…」

ナイト

「まあまあW行くぞー!!」

そういうと、私とナイトは目を閉じて印を組んだ。

そして組んだまま、胸の前に持ってきて私とナイトは意識を集中させた。

ナイト

「行くぞ、莉菜」

莉菜

「OK…いつでもよろしく」

ナイト

「闇月忍法・孔雀惣寿」

莉菜

「（水！！）」

私の考えを理解した水と氷が砂に向かって進んでいった。

その上からナイトの忍法で水と氷は透明になりつつ、砂の刃を止める為近づいていった。

それに気付いた歌怨が、黒い霧を使って霧絨毯きりじゅうたんを作り、地上から見

ていた。

樹影家の子の足を捉えようとしていた砂を、水がドロドロに柔らかくした。

それに気付いたのか、砂の大群が襲ってきた。

それを守るかのように今度は草が地面の中から出現し、包丁で何かを切るかのように尽く消し去っていった。

我愛羅：「……………邪魔しやがって」

テマリ：「？」

莉菜

「（水遁・轟邱?!?!?!）」

そう心の中で唱えると、砂に水の馬車が追突した。

水に負けた砂が固まって、次第には砂が引き下がって我愛羅の元に戻っていった。

ナイト

「ふう…終わったな」

ゆっくり目を開け、ナイトが笑顔を浮かべながら私の方を向いてきた。

それに続いて私も印を組むのを止め、ナイトと同じ事をしていく。

歌怨

「黒霧落刹！！！！」

すると黒い霧の中から雷が、敵に墮ちて見事に意識を失ったらしい。

ハヤテ

「勝者、音殺歌怨！！」

ナイト

「お。歌怨も勝ったのか」

莉菜

「おめでとう！！」

すると歌怨が照れながら「ありがとう。」と言っていた。

そしてまた次の対戦名が発表された。

(飛ばします><)

虚しくも…チヨウジはすぐに勝負が終わって最終戦に入った。

それは…我愛羅とリーさんの対戦だった。

我愛羅は、砂を使って下に移動していた。

リーさんもやる気満々だったけど、私は心配で行く前にリーさんを呼び止めた。

リー

「り…莉菜さん／＼／＼」

莉菜

「リーさん！！！！危ないと思ったらこれを飲んで下さい！！！！」

テンテン

「これ、何？」

莉菜

「耳元で）これは、私が作った回復薬です！！それに予てこの中には回復・負傷を治す薬でもあるんです！！！」

絶対に我愛羅がリーさんを生きたまま返らせるはずが無いと思います！！！」

ですから本当に危ないと思った時は止むを得ずに飲んでください！！！」

リー

「は…はい！！！！／／／／」

我愛羅

「まだかッ！！！」

リー

「余り敵を待たせない方がよさそうですね…では、行ってまいります！！！」

そう言い、戻っていくリーさん。

テンテン

「何を言ってたの??」

莉那

「内緒」

テンテン

「ええー!!!教えてよー!!!」

莉那

「無理ーwww」

そう言いながら歌怨達の元に戻る。勿論私は走ると睨まれそうだがして水を使つて瞬間移動をした。

ナイト

「何やってんだよ…お前は…」

莉那

「何って?負傷者を出さない運動だけど?」

ナイト

「…はいはい。俺はもうそれ以上言わねーよ」

莉那

「何その呆れた返答!」

歌怨

「…莉那、試合を見なくても良いのか？」

と、歌怨に言われてナイトへの質問は途中でやめた。

それと同時にハヤテさんが笛を鳴らし、リーさんが得意の体術で突っ走っていった。

だけど…全て、砂の盾で邪魔をされて攻撃どころか我愛羅に触れられない状態だった

リー

「はぁッ！…！」

ナルト

「糞ッ！！あの砂の盾をなんとかすれば…勝てるのに…！！」

我愛羅は…あんなに甘いハズが無い。

絶対にリーさんを無事に帰らせるはずが無い。

殺意と憎しみでしか…今はそれしか考えてない…我愛羅の事。

私がああ薬を渡したとしてもリーさんは使わない…か、

我愛羅に壊されるか…のどっちかしか無いと思う。

仮にもリーさんが飲んだとしても…我愛羅はそれを見て…殺そうとするに違いない。

まあ、私が蘇らせれば良い話…。

だけどその人を思う気持ちが強ければ…の話なんだけどね…。

そんな事を思っているとリーさんが突然、足から変な者を取り始めた。

歌怨

「両方10tもする重りか…」

と、三人してマコト先生の方を見る。

マコト

「なっ…なんだよ…!!」

ナイト

「アイツ（リー）は10…なのに俺らは30とか酷すぎじゃねーのか？」

マコト

「…良いんだ。私の教え子だからな…それぐらいの事は…!」

莉那

「ただ単に…マコト先生の趣味で付けたんですよね？」

マコト

「…!!?…!!」

歌怨

「そつなのか…やはりな」

莉那

「うんvv 劉冬眼で先生の話を聞かせて貰いました」

ナイト

「こんな上忍、ありがよ」

マコト

「何の事だか…」

歌怨

「“こんな事まで分かるようになったとは…危ない危ない” そういう事ですか…」

マコト

「何故私の心の声を??！」

莉那

「それも私の劉冬眼と歌怨の写輪眼で」

マコト先生は思った…。

『こいつらは…危ない』と。

って言うか試合…!!

気付くと…リーさんが包帯を取っていた。

見る見る内に我愛羅の体が砂となって、割れていった。

リー

「何!!!??」

そう…あれはただの砂の抜け殻だった。

やっぱり…我愛羅がこんなに簡単にやられるはずがない。

あの時だって…上忍を…15人程度いた上忍を砂で殺した…。

それと同じように…簡単にやられるはずがないよ…。

するとリーさんの後ろから我愛羅が現れた。

でも…あれは…あの時の我愛羅…。

10年前…我愛羅が夜叉丸さんに殺される数分後に…目覚めたもつ
一人の我愛羅…。

上忍達を簡単に砂で殺したもう一人の我愛羅…。

そう思うだけで体の力が抜けそうになった。

ナイト

「おい！！莉那！！大丈夫か？！」

莉那

「…ッ…駄目…」

ナイト

「は？…」

莉那

「リーさんが…殺される…」

歌怨

「どうした？」

そう言った時だった。

我愛羅が不敵な笑みを浮かべて、印を結んだ。

するとリーさんに砂が炸裂した。

今度は砂の海がリーさんを襲った。

駄目だ…助けにいかないと…

歌怨

「何だあれは…」

莉那

「あれは…“流砂瀑流”…」

その技は小さい時、私と我愛羅が一人で考えた技でもあった…。

私は“流水瀑流” 我愛羅は“流砂瀑流”

二人で考えた大切な技…なのに我愛羅は…殺しに使おうとしてる…
どうして!!

我愛羅

「…!?!」

莉那

「薬ー!?!?!飲んでください!?!?!」

テンテン

「薬?」

テマリ

「薬だと?」

するとリーさんが笑みを浮かべ、蓋を開けて飲もうとした時だった。

また我愛羅の砂が邪魔をして、…ガラス事、壊された。

予想はしてたけど…ここまでやられるとはね。

だけどリーさんの方を見ると、いつもの笑顔に戻っていて「ありがとうございましてッ!?!?!ノノノノ」と会釈しながら言っていた。

莉那

「はあ…良かった…一滴でも二滴でもそんなに効果は無いけど…時間をお費やしてくれるから…やっぱり薬の研究、しといて良かった…」
そんな事を言っても我愛羅の攻撃は止まりはしなかった。

「ただ…リーさんが…禁術ともされてる…裏蓮華をやるつもりとしていた。」

それをリーさんは、開門・休門・生門・傷門・杜門までを開門した。

我愛羅：「なんだと!？」

するとリーさんは俊足で我愛羅をまた蹴り上げた。

歌怨

「上だ!！」

リー

「また砂の鎧ですか…それでは来れでどうですか!！」

するとリーさんは我愛羅を二人、いるかのように蹴っていた。

それと同時に砂の鎧も徐々に剥がされていった

かなりの距離で砂の盾が上手く追いついていなかった。

ここで決めれば…チャンス…リーさん!!!

リー

「これで最後です!!!はああああああっ!!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!

裏蓮華ツツ——————!!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!」

その瞬間、物凄い風が巻き起こった

誰もが終わった…そう思ってたが、違った。

瓢箪が砂となり、我愛羅を庇ったのだった。

その成果、リーさんの左腕と足が負傷した。

だが…我愛羅はまだ終わらなかった。

莉那：「何でッ…何でこんな事するの！？ねえッ！！！」

次第には頬を伝って大量の涙が溢れてきた。

莉那：「どうして変わっちゃったのッ！！！」

ナルト：「姉ちゃん…」

我愛羅：「…………ツ…………」

サクラ：「莉那…」

すると我愛羅が頭を抱えて、苦しみ出した。

我愛羅：「何故…何故助ける！！…」

莉那：「リーさんは！！！！リーさんは…木ノ葉の…大切な仲間なの！！！！」

我愛羅：「なか…ま…だと…！！？」

莉那：「それでも…我愛羅がこれ以上…やるって言うのなら…私を殺してッ！！！」

皆：「!?!?!?!?!」

莉那：「我愛羅はあの時言ってくれた！！！！認められなくても良い。だけど大切な仲間を守る””って！！！！だから私も…大切な仲間を守り通す！！！！！！」

我愛羅：「……………」

テマリ：「大切な…仲間？」

バキ：「（我愛羅には…到底、分からないだろうな…）」

すると砂の盾も、瓢箪の中に戻っていった。

そして我愛羅は立ってどこかに向かっていった。

我愛羅：「止めだ…」

莉那：「…………ツ…………」

ハヤテ：「勝者、我あ…！？」

後ろを振り向くと…意識を失いながらも立っているリーさんがいた。

リーさんは懸命に歩いてきた…でも、私の前まで来ると気を失って倒れてしまった。

その体を支えて、私はリーさんの体を直し始めた。

医療：「後はこちらでやります…！」

莉那：「はい…」

ナルト：「姉ちゃん…！」

ナイト：「莉那…！！お前、何であの術を使ったんだよ…！！」

リーさんの元にナイト、ナルト、ガイ先生が駆けつけた。

莉那：「……………私はだいじょうぶ……………」

そう言ったつもりでも……………私も意識を失って、ナイトが体を支えてくれた。

ナルト：「姉ちゃん！！しっかりしろよ！！！！姉ちゃん！！！！」

ナイトは……………私の体を支えながら、ゆっくりと地面に寝かせようとしていた。

ナルト：「おい！！閻月！！！！姉ちゃんはどっなただよ！！？」

ナイト：「黙ってる！！！！」

ついに怒ったナイトがナルトの方を睨みながら怒鳴った。

ナイト：「少し……………黙ってる！！！！」

それだけ言うと、片手で印を組み、二階のマコト先生達がいるとこ

るに移動をした。

歌怨：「まさか…飛び込むとはな…」

マコト：「莉那が言っていた…あの言葉は…一体…」

ナイト：「……………」

歌怨：「あの日もそうだったよな…中忍試験、前日辺りに餅屋に行こうとした時…俺たちはそこでナルト達の喧嘩に入り込んで…その時、莉那が砂の奴らに向かって言った。

その時もあの砂漠の我愛羅がいた。そして何か小声で言うと莉那は俯いていた」

マコト：「そんな事が……………」

ナイト：「…俺のただの勘だと思っただけどさ…莉那とアイツ、小さい頃とか…出会って何か起きた…って事なのか…？」

サクラ：「？」

カカシ：「どついつ事だ？」

ナイト：「余り期待はしない方が良くけど…ずっと前に莉那が言うてたんだ。

“分かってもらいたい、大切な人がいる”って…。

それにさっきも“どうして変わったの”と、アイツに問いかけていた。

普通だったらアイツ（我愛羅）はどんな奴だろーが攻撃をするはず

…なのに莉那にはしなかった。

それにアイツが使っていた“流砂瀑流”って言う技も知っていた。

普通ならそこまで知らないはず…なのに莉那は知っていた。それに歌怨の試合の時も砂を草・水・氷を使って歌怨の手助けをしていた

…」

009* 我愛羅の戦い（後書き）

魔歩です！！！！！

たまにDSiからやるときがあります……；

文章が短かかったり、途中で区切れていたら「ああ……なるほど……」
的な感じで軽くスルーしてくださいww

それでまたPCで更新する時にはコピーとかして前の奴に繋げたり
しますのでww

010* 我愛羅の行動(前書き)

そして、無事第三の試験・予選も無事に終わり

010* 我愛羅の行動

猿飛：「これから本戦の説明を始める」

ナイト：「莉那？大丈夫か？」

莉那：「何とか…」

あれから、十尾の力も貰って早く回復をした私だった。

でも、これで中忍になれるんだね…。

猿飛：「本戦は諸君の戦いを本戦で晒す事になる」

その頃…私の分身は、カカシ先生と一緒にサスケの所に向かっていった。

火影様の話は始まる前に、カカシ先生に頼まれて分身を出しておいたんだよね。

ナイトと歌忍は完璧に見破ってると思うんだけど…マコト先生も上

で見守ってくれてるし。

カカシ：「やはりか…」

莉那：「カカシ先生…」

私とカカシ先生が目を合わせると私の分身が水になり、サスケの元に向かった。

劉冬眼で見えていたけど…カブトって人がサスケを殺しかねない。

（ ）

莉那：「まさか大蛇丸がサスケを狙うなんて…」

カカシ：「まあ…呪印も付けたの、大蛇丸っぽいしね」

莉那：「……………」

（ IN予選会場では ）

猿飛：「アンコが持つてる箱の中から一人一枚、取るのじゃ」

え？10??

ナイト：「俺、12」

歌怨：「15…か」

響：「左から順に教える」

〵〵〵

莉那：「10です」

ナイト：「12」

歌怨：「15」

？：「11」

? : 「13」

? : 「16」

猿飛 : 「これはトーナメントでもあるんだ」

と、言い見せられた紙に…

莉那 : 「（滝隠れの人か…）」

ナイト : 「マジかよ…また草かよ…」

歌怨 : 「滝か…」

それも私の相手は、物凄そうな刀を持った馬鹿力っぽい人。

ケモリ・ゴウジって言う人だった。

おまけに滝って…。

っていつか…我愛羅とナルトと同じブロック…。

最悪ッー！！！！

って…もし、私が勝ったら…ナルトか、我愛羅と当たるって事？

ナルトは極力避けたいんだよね…。

大事な弟だしさ

草：「質問。スリーマンセルのチーム内で当たる事はありませんよね？

例えば…砂の人達とか木ノ葉の10・12・15の人たちとか…」

猿飛：「安心せい。当たる事は無いぞい」

ナイト：「おっしゃー！！」

歌怨：「…お前は俺と莉那、どっちと戦いたくないんだ？」

ナイト：「即答」勿論お前だッ！！！」

その後、何でか知らないけどナルトとエビス先生と一緒に風呂場で修行をする事になった。

エビス：「まずは足の裏にチャクラを執着させるのです！！！」

莉那：「…はぁ…」

ナルト：「やってくれないと分かんないってばよ！！！」

エビス：「ふむふむ。では、お手本に莉那さん、やってみてください」

莉那：「…（何で私が…）」

と、そんな事を思いながらやる気の無さそうな表情を浮かべて印を胸の前で組んで、目を閉じた。

<<ポオオオンッ！！！！>>

ナルト：「おっとととと！……どわあッ！……！」

ナルトがまた失敗をして、湯の中に落ちそうになった時、水が庇って助けてあげた。

莉那：「ナルト、良い？ちゃんと聞いててね。」

御湯の上を歩くには一定量のチャクラを流し込む。はい、やってみて」

ナルト：「……………こうか？」

莉那：「そう。次に御湯に片方の足を付けて、自分の体重とかでの重さの量を考えて下に流し込む」

ナルト：「どわあああッ！……！……！」

莉那：「だからー！……！ゆっくりやらないとやらないと駄目でしょ！……！」

そう言った時だった。

自来也：「にしても君…可愛いのか？」

片手で印を組む状態で目の前に持つてくると、煙とともに数足のライオン獣が出てきた。

莉那：「自来也さん。出来ればナルトの修行の手伝いをしてもらえませんか？」

見て貰うはずの上忍さんも貴方に倒されちゃった訳ですし…」

自来也：「おうー！任せとけ！！！（糞…獣どもめ…）」

ナルト：「姉ちゃん、サンキューー！！」

自来也：「姉ちゃん？お前らは姉弟か？」

莉那：「違いますよ。義理の姉弟です。私は天野莉那。こっちは…」

ナルト：「うずまきナルトだってばよー！！」

莉那：「両親が小さい頃、亡くなって今は私がナルトの面倒を見て

いるんですよ」

自来也：「そうか。」

(浜辺にて)

莉那：「そう！！その調子で水の上に乗ってみて！！」

ナルト：「お…おっ！！！」

あれから…色々という色々な事があって、説明したくないぐらいの事が起きた。

それでも自来也さんはナルトと私の修行を見てくれるということ。今は、ナルトと一緒に水の上で修行をしていた。

莉那：「そう！！そのまま歩いてみて…ゆっくりね」

ナルト：「ごうか？」

私が笑顔で答えるとナルトが馬鹿みたいに大はしゃぎをして喜んで

いた。

その間に私は靴とかを履きに自来也さんの所に行っていた。

自来也：「嬉しそうじゃのー」

莉那：「はい…一時はどうなるかと思いましたけどね…」

自来也：「…変な事を聞いても良いか？」

莉那：「はい？構いませんけど…」

自来也：「ナルトは…九尾の封印をされているのじゃろ…」

莉那：「…自来也さんが言う通りです。そして私は…十尾の人柱力です」

それを聞いた自来也さんが吃驚していた。

自来也：「十尾だと！？確か…九尾までのはずじゃが…」

莉那：「…これがその封印ですよ」

そう言い、右肩付近にある黒い封印を見せた。

自来也：「確かに…九尾の封印と同じじゃな…まさか!!!10年前に木ノ葉で起きた事件…」

莉那：「九尾の妖狐の…事件ですよ。私の両親もその時、いました…。ほとんど、劉冬眼で見えていましたけどね…」

自来也：「そうか…」

それから…修行後の疲れということで、御湯に入る事にした。

勿論私は二人から離れた所でエンテイを口寄せしていた。

それに、4匹の野獣たちも一緒に口寄せをしていた。

だってね…自来也さんに見られたら

それにこの子達は良く鼻が効くしね。

『お前は強くなってるな…』

そう？ありがとう、十尾^^

何かアカデミーに通ってた時、話かけようとしてたんだけど、どうも無視されっぱなしで…

w w
だけどたまに十尾の方から話かけてきて今では中が良いなだよね w

十尾も素直で本当、頼もしいしね

INN夜

莉那：「やっぱり夜って最高」

そんな事を言いながら屋根の上を飛び越えていた。

ってあれ？ハヤテさん？

そう思って近づいた時だった。

ハヤテさんが剣を持って砂の人に向かっていった。

ただど惜しくも砂の人がそれを間につけ、殺されそうになった時だった。

莉那：「やめてください！！！」

砂の：「ほう…君は…我愛羅の攻撃を阻止した…」

莉那：「こんな夜中にどうしてハヤテさんを殺そうとするのですか？」

砂：「いえいえ。そんな事はしませんよ。このお方はお返ししますよ」

そう言って、ハヤテさんを物のようにこっちに向かって投げてきたけど…

水がそれを尽く受け止めて、私の近くで寝かせた。

砂：「そうそう・・・言っておきます。」

我愛羅とはどんな関係か知りませんが…これ以上彼に近づかない方が良いでしょう。

彼は君を殺すかもしれませんが…。それに彼にとって君はただの知り合いですかね」

莉那：「そんな事…無い!!!」

我愛羅は殺したりなんかはしない!!!」

砂：「何故そう言い切れるのかね？」

莉那：「私は…我愛羅を…信じてるからッ!!!」

我愛羅にとつてただの知り合いでも…私にとつては…大切な人!!!

!!!
絶対に殺しはしない!!!」

砂：「ほう…信じてる…ですか。例え彼が化物だとしても、大切な仲間だと言えるのですか？」

莉那：「……………」

ただ我愛羅の砂が本当に我愛羅の上忍でもある人を殺そうになった。

莉那：「やめて！…！もういいからッ！…！」

我愛羅：「まだだッ！…！…！」

バキ：「うわああああッ！…！…！…！…！」

莉那：「我愛羅ッ！…！…！…！…！」

そう叫んで我愛羅が上げている方の腕を下ろした。

莉那：「もう…やめて…お願い…だからッ」

そう言うと砂が見る見る内に我愛羅の瓢箪の中に戻っていった。

そのまま息を切らしながら砂の上忍が戻っていった。

私は掴んでいた腕を離して、ハヤテさんの元に向かった。

「ただど…私が出るのが遅かったのか…大量出血をして、もう死んでいた。」

私がハヤテさんを蘇らせようとした時、右腕を掴まれた。

我愛羅：「むやみに人を蘇らせるな」

私はその手を振り払うようにして、腕を左右に振った。

莉那：「どうして…!!何で私がやるうと思った事に邪魔するの!」

我愛羅：「…昨日、それで意識を失っただろ。」

莉那：「……………」

我愛羅：「何があったかは…知らないが…やめておけ」

莉那：「……………そのままに……………しておけとでも言つの?」

我愛羅：「他にどうしろと言っ訳だ？」

莉那：「……………」

我愛羅が腕を組んでそのまま、どこかに行こうとした。

莉那：「…我愛羅…ありがとう。助けてくれて…」

そう言った。さっき、…助けて貰ったしね。

そう言うと我愛羅が一度止まって、それでまた歩きだした。

(エンディング)

莉那：「ああ……………寝坊……………」

只今…10分寝坊した。

すぐさまナルトの部屋に行くと、ナルトがクマの付いた顔でこっちを見てきた。

011* 第三試験、暗殺（前書き）

無事、会場に到着したナルトと莉那。

だけどそこには…見たくもなかった人がいたのだった…。

それは、六年前、我愛羅を暗殺しようとした…我愛羅の父親でもある風影様がいた…。

011* 第三試験、暗殺

莉那：「何で…風影が…」

ナイト：「何か同盟だからとさ。ってか風影じゃなくても良くね？」

歌怨：「砂の奴らに丸聞こえだぞ」

莉那：「馬鹿」

ナイト：「てめーが言ったんだろーが！…！」

莉那：「そうだったけ？」

ナイト：「…はあ……そういえば今日は龍駕刀を腰に懸して、やる気満々じゃん」

歌怨：「今日の相手は相当強いと莉那も思うか？」

莉那：「…一応ね。もし…当たったらって感じで」

すると二人は黙って、何故かお互い、見合っていた。

ナイト：「それって…あの砂漠の我愛羅の事だろ？」

莉那：「……………そう…かもね」

歌怨：「…莉那。中忍試験が終わったら…砂の奴との関係とか教えてくれないか？」

莉那：「……………」

歌怨：「無理に教えろとは言わない…だが、お前が良く悲しそうな表情をするからな…
悩み事でもあつたらいつでも相談しろよ」

ナイト：「俺ら、スリーマンセルだろ（ニカ）」

莉那：「…歌怨…ナイト…ありがとう…後で…聞いてくれる？」

「…勿論だ／だぜ」

私、この二人とスリーマンセルで良かったって…思った。

こんなに和解出来る人たちはそういない…。

本当に歌怨とナイトが同じ11班の仲間良かった。

試験官：「本戦の前に…トーナメントを少し変えたから…確認しておいてくれ」

それを見ると…一回戦は滝隠れの人で…二回戦目が…カンクロウ？
か草の人？

試験官：「それじゃー、一回戦目はつまりまきナルトと…ひゅうがネジだな。

その他の者は上に上がっている。

それと予選と同じでルールは無し。ただどちらかが死ぬか負けと認められた時には終了だ」

莉那：「ナルト、頑張ってね」

ナルト：「おう…！任せろってばよ…！莉那姉ちゃん…！」

ナイト：「とか言って負けんじゃねーぞ。」

ナルト：「余計なお世話だっつーの！ー！ー！」

シカマル：「マジかよ…女かよ…めんどくせー」

莉那：「戦う前からやる気無さそうだねwww」

シカマル：「仕方ねえーだろ。あーあ。最後まで残るんじやなかつたよ…本当めんどくせー」

莉那：「シカマルってさ…」

シカマル：「あ？」

莉那：「必ず言葉の最後には“めんどくさい”が入るよね…まさかの口癖？」

シカマル：「答えるのもめんどくせーよ」

莉那：「何それ？……」

ナイト：「おい。早く行くぞ」

と、ナイトの言葉で待合室に向かっていった。

だけど…行こうとした時、この間、ハヤテさんを殺した砂の上忍に
出会った。

通りかかった時、その人は耳元で『この間の事は誰にも言うな。』
と言っていた。

アンタ達がやるうとしてる事は…劉冬眼で見させて貰ったから…。

悪いけど木ノ葉を潰させないから……！！

歌怨：「莉那？どうかしたのか？」

莉那：「何でもない……」

待合室にて

ここはすっごく見所の良い所だった。

それに…人という人があれなんだけどさ…

何で私の左隣がカンクロナ訳？

ものっすごくついてないかもね…。

ナイト：「アイツも良くやるよなー。真正面から行くなんてよww
」w

シカマル：「それがナルトなんだしよ。めんどくせーけど、アイツの考えはすっごいぜ」

莉那：「流石は私の弟だ」

歌怨：「…そうか。よかつたな」

莉那：「だってさ！！あんな弟、私は誇りに思うよ！！！！思わない？」

我愛羅………」

ナイト：「ぜってー思わねー」

シカマル：「……思わねーよw」

歌怨：「さーな」

莉那：「何で！？私はすっごく思っよ……！」

そう言った時だった。

マコト：「莉那はいるか？」

莉那：「はい？」

マコト：「お。調度良い所にいたな。お前に聞きたい事がある。少し試合観戦は出来ないが……」

莉那：「なんででしょうか？」

マコト：「負傷者を治して貰いたいんだ」

莉那：「了解しました」

それから私は観客席の方に連れてこられた。

莉那：「マコト先生：負傷者ってどこにいるんですか？」

マコト：「いや。負傷者はいない」

莉那：「え？」

マコト：「莉那。隠さずに教えてくれ。ハヤテの暗殺の事件、何かを知っているんだろ？」

莉那：「……………それは」

マコト：「教えてくれないか？暗部舞台が血を調べた所、莉那の水の水分が残っていたと聞かされた。

そこで火影様からの頼みでもあって…何があつたんだ？」

マコト先生は腰を落として、私の肩を掴んでいた。

莉那：「……………それは……………言えません」

マコト：「なら…劉冬眼で見させてくれないか？」

莉那：「劉冬眼ですか？……………でも……………」

マコト：「大丈夫だ。私を信用しなさい。莉那は人を殺すような事はしないだろ？」

「なんたつて俺の愛すべき部下だ。お前たちの司令官でもある俺が一人の部下を裏切ったりはしない」

莉那：「マコト先生…分かりました！！行きます！！」

マコト：「ああ。頼むぞ」

私が印を結んだ状態で胸の前まで持つてくると先生も同じ事をして目を閉じた。

莉那：「 劉冬眼 」

私が見た会話・映像を全てマコト先生に見せ終わると先生は驚いていて、その後にはこつと微笑んで私の肩を叩いた。

マコト：「 脅されていたんだな…それを教えてくれて、ありがとう。後は任せる。この話は火影様に伝える。大丈夫だよな? 」

莉那：「 お願いします。私にも出来る事があつたらやります!! 」

マコト：「 未来での話は…砂の奴らが脱走か…その時、遅れて歌怨・ナイトと共に向かってくれ。 」

莉那：「 遅れて…? 」

マコト：「 ああ。戦闘をする中で負傷者が出るかもしれない。

そこで…莉那には少し負担がかかるかもしれないが…分身を作つて医療をするんだ。

そして本体は…暴走しそうな我愛羅と、サスケ・ナルト・サクラの元に向かうんだ 」

莉那：「 分かりました!!!これを歌怨とナイトにも伝えます!!! 」

マコト：「ああ^^：出来るだけ、二人にこの話をする時は皆から距離を置いてな？地獄耳の奴もいると聞いたからな」

莉那：「はい!!」

そういつと、片方の手を胸の前に持つてくると煙とともに私は消えた。

「IN待合室にて」

ナイト：「お。帰ってきた」

(ボオオオン)

莉那：「只今」

歌怨：「負傷者はどうだったんだ？」

莉那：「それについての話があるの。マコト先生にも伝えて…今度は二人にも伝えろって言われて…」

ナイト：「いかにもこの試験が終わったらか何か起こるようなもんじゃねーかよwww」

この時、ナイトは気付かなかったけどテマリさんとカンクローは額から一粒の汗が流れていた。

歌怨：「お前の予想は絶対外れている。」

莉那：「劉冬眼」

私の行動（？）を見て、二人は同じ事をしなかったけどずっと私の方を見ていた。

カンクロー：「（何をしているんだ？）」

テマリ：「（まさか…バレたのか？）」

そして、私が全てを教えると…

歌怨：「……そうか」

ナイト：「アイツが勝つんだろ？良い事じゃねーかW」

そう。最後に『話を変えて』って言ったんだよね…。

絶対にテマリさんとカンクロー、チラッってこっちを見てたから…

歌怨：「死ぬかもしれないのにな」

莉那：「大丈夫！！私の弟だから」

ナイト：「どこからその笑顔が湧いてくるんだかWWW」

歌怨：「莉那らしいって言えば莉那らしいけどな」

その時、私と戦う相手の人がどこかに向かっていった。

ナイト：「そうそう。お前、次だつてよ」

莉那：「え！？我愛羅とサスケじゃないの?!」

歌怨：「そのサスケがまだらしく、飛ばした」

莉那：「何で…まあいちゃ…それじゃー、行ってくる」

ナイト：「負けんじゃないぞWWW」

莉那：「分かってるー!!!」

歌怨：「莉那が負けた事、一度も無いだろ？」

ナイト：「だなWWWアイツ一回も負傷とかねーよなWWW」

シカマル：「マジで!?アイツそれでも人間か?!」

ナイト：「人間じゃなかったらなんだよWWW」

そんな私は……

莉那：「試合 試合」

試験官：「そうか…。我愛羅対サスケを次のお前たちになったんだな」

莉那：「そうなんですか？」

滝：「ケツ。何で第一回戦から女なんだよ」

え？ 何か…舐められてるような…。

試験官：「では…始める！！」

そう言った途端、敵が背中から刀を出して私の方に振りかざした時だった。

水が私を守った。

莉那：「女だからって…嘗めない方が良いよ？」

滝：「ム力つくやろーだぜ…はあああッ…！！…！！…！！」

すると今度は足場を狙ってきたけど私は、ジャンプをしてその刀の上に乗った。

莉那：「だから言ったでしょ？」

滝：「チッ」

そのまま距離をおいて、ジャンプすると同時に刀を振り回してありとあらゆるものを破壊していった。

莉那：「何この馬鹿力……」

だけど油断した成果……土遁で封じ込められた。

莉那：「あー……こういつの……無いわ」

こういつ時ってさ……何か……。

莉那：「水遁・水上切……!!」

滝：「んな事出来るか？そんな刀で…何!？」

莉那：「試してみる？」

滝：「やってやるーじゃねーかよッ!!!」

片手で刀を持ち、空いた方の手でチャクラが飛び回っていた。

そして鋭い音と共に、刀が混じりあつたけど…

滝：「なんだと!？」

敵の丈夫そうな刀が龍駕刀に流し込んだチャクラで二つに割れた。

莉那：「龍駕刀は、硬くて物理攻撃には有利な刀。

即ち、そんな丈夫そうな刀でも簡単に二つに裂けられる。

これで終わりだよ!!! 雷遁・黒斑差 !!!!!!」

すると敵の体に一気に麻痺が走った。

莉那：「螺旋丸 ツ!!!!!!!」

火影：「!？」

風影：「……………」

?：「ほう…四代目火影の螺旋丸を…流石だな…」

『どうするのだ?このまま殺すのか?それならば、力を貸そう』

莉那：「大丈夫。ただ今は壁に追突して気絶中なだけ…」

試験官：（本当、死んじゃったんじゃないのか?おい…）

だけど…まだ、死んではいなかった。

滝：「いってーな…」

そう言いながら、壁の中から出てきた。

滝：「よくもやってくれたな…おかげで体中、麻痺ったぜ…」

莉那：「龍駕刀と螺旋丸でも…死なないなんてね…」

ナイト：「やべーな…」

歌怨：「……殺しかねないな」

ナルト：「どついう事なんだつてばよ？」

ナイト：「一々説明すんのめんどい」

ナルト：「はあ？教えてくれつてばよ！…！」

歌怨：「…莉那の得意な…水遁刹の始まりつてことだ」

滝：「これでもくらえ！！！ 土遁・おとし蓋 ……！！！」

すると地面から大きな物が浮かび上がってきていたけど、それを水の波が襲いかかった。

滝：「チツ。まだだ!!!」

すると今度は土分身が現れて、クナイや手裏剣を投げてきたけど…

水・氷が四角い形に変化して、盾となって庇った。

莉那：「物理攻撃は無駄。」

滝：「余所見すんじゃないぞ!!! 土遁・開土昇掘 !!!」

ってあれ、上忍レベルじゃなかったけ!?

だけどそれでも水が盾となった。

莉那：「っていつか分身が邪魔!!!!」

それと同時に一気に土分身たて目掛けてクナイを投げつけた。

すると「ボオオオンッ!!!」「」と言つ音とともにどんどん消え去っていった。

滝：「貴様ツ…」

莉那：「悪いけどこれで終わらせて貰うよ……！」

そう言って刀をしまつと…素早く印を結び始めた。

ナイト：「うお……！ここで出すのか……！」

歌怨：「それ程厄介な奴つて事だな」

ナルト：「出す？」

ナイト：「見てろ……！」

莉那：「口寄せの術・スイクンツ……！！！」

煙とともにスイクンが現れた。

周りからは「何だれ!?」「という声が湧き上がった。

そういうとスイクンも嬉しそうに煙とともに消えていった。

マコト：「流石だな……」

私はそのまま、待合室までに移動した。

莉那：「やったよー……！勝ったよー……！」

ナルト：「姉ちゃーん……！」

莉那：「ナルト……！やったよー……！」

ナルト：「そっぴやさ、あの螺旋丸？ってどうやったんだってばよ！？」

莉那：「え？んー……分かんない」

（ズッコッ

ナイト：「ってか良くあの状況でスイクンとかを出せたよな」

莉那：「でしょ！とっさに閃いたのがあれなんだwww」

そして：シカマルテマリさんの勝負も終え、ナイトと歌怨の勝負も終わった。

最終戦で我愛羅とサスケの試合となった。

それで私はマコト先生にまたまた呼ばれて今度は本当に負傷者を治し終えて、戻っていた途中だった。

莉那：「やっぱり負傷者が多かったね……」

すると血の臭いがしてきた。

私、結構鼻が良いんだよね……。

それと同時に砂の臭いがして、一瞬寒気がした。

もしかして……と思った私は急いでその場所に向かっていった。

莉那：「！！！！？？」

私の勘は当たっていた。

誰かがこっちに向かって走ってきていた。

その後ろから砂の大群が襲ってきていた。

私が片手で印を組むと同時に水が大群の砂を押さえ込んだ。

莉那：「大丈夫ですか？」

？：「ああ…助けてくれてありがとよ…」

それだけ言うとその人はどこかに向かって走っていった。

だけど問題なのは…砂の力が強くなってきていた事。

我愛羅：「チッ」

莉那：「何が気に入らないの!!!？」

すると力を増していた砂も瓢箪の中に戻っていった。

そのまま我愛羅は不敵な笑みを浮かべてどこかに行ってしまった。

莉那：「何で…変わっちゃったの…！」

IN待合室にて

何このジメジメ空気…

歌怨：「今度こそ終わったのか？」

莉那：「うん。何かあったの？すっごくジメジメした空気が流れてるけど…」

ナイト：「アレだ」

そう言って下の方を指さした。

そこには頭を抱えている我愛羅と驚いた表情をしているサスケがいた。

成程…だからテマリさんやカンクロウもやばそうな感じなんだね…。
納得。やっぱりサスケとの試合が終わったら木ノ葉潰しをするみたいだね…。

私がナイトの左横に行った時、ナイトが耳元で何かを言ってきた。

ナイト：「耳元で」さっきの話、本当なのか？」

それに対して頷く。

ナイト：「そうか…」

莉那：「もうじき…私たちは席を外す事になるって」

歌怨：「…ああ。分かった」

そう言った時だった。

我愛羅の絶対防御がサスケの千鳥によって破られたのだった。

莉那：「あれって…第三の…目？」

テマリ/カンクロウ：「!!!？」

ナイト：「は？第三の目？」

莉那：「あの術…確か…」

あの時にも使った術…泣きじゃくっていた私を助ける為、我愛羅が使ったあの術…。

カンクロウ：「お前、知ってるみたいじゃん？」

莉那：「だってあの術は…我愛羅が私を庇って使ってた術…」

テマリ：「庇ってたと!？」

するとサスケが必死に腕を取ろうとして、抜けた瞬間、茶色い腕の
ような物が伸びてきた。

莉那：「！！！！！！」

あれは…守鶴！！！！

まさか我愛羅…血を！？

テマリ：「まずいぞ…殺される…」

すると今度は鳥の羽のような物が落ちてきた。

歌怨：「幻術だ」

「「「解！！！！」」」

ナイト：「誰だよ。試合中の邪魔をしてくる奴は」

そして今度は火影様の方から爆音が聞こえた。

莉那：「始まったようね…」

ナイト：「いつでも来いや」

するとテマリさんとカンクローウがサスケ達の元に下りていった。

莉那：「シノ！！アイツらの後を追って！！！！」

シノ：「ああ！！分かった」

そういつとシノも奴らの後を追って下に飛び降りていった。

莉那：「分身の術」

ナイト：「何で分身なんだよ！！」

莉那：「これも劉冬眼で見た映像。ナルト達を起こしに行く！！！！」

そういつと、分身の方を行かせて私たちはマコト先生の元に急いだ。

012* 暗殺、目覚める守鶴

木ノ葉のどこかで…地面が揺れていた。

ナイト：「音と砂かよ…。条約は何の為に作られたんだか…」

歌怨：「条約はただのカモフラージュにしか過ぎない。」

莉那：「私たちに出来る事をする。今はそれが一番」

『そのとおりだ。莉那よ』

ありがとう。十尾。私たちだけでも木ノ葉は救えるよね…？

『勿論だ。…どうやら敵の大蛇が来たようだな』

そこには三匹の巨大な大蛇がいた。

背中に付いてある呪印…まさか大蛇丸の！？

ナイト：「大蛇も良いが：狼の方が良くねーか？ww」

私たち三人はどこかの屋根の上で大蛇の行動を見ていた。

歌怨：「狼も大蛇と同じだろ」

ナイト：「違いーよ！！大蛇は俊足で走らないだろ！！」

莉那：「俊足とか狼とか大蛇とかどうでも良いから早く出して！！」
「」

ナイト：「うっせーな！！わったよ！！！！」

そう言って前に出て片手で印を結びはじめるナイト。

ナイト：「行くぜ！！口寄せの術・大狼！！！！」

煙と共に三体の巨大な狼たちが現れた。

ナイト：「あの大蛇を殺せ！！」

莉那：「殺さなくても良いんだよ！！！！」

そう言い終える内に狼達は物凄いヨダレを垂らして大蛇の元に向か
つていった。

歌怨：「今度はどうするんだ？」

莉那：「……我愛羅の暴走を……止める！！！！！」

ナイト：「……………」

そして私たちはナルト達の後を追う為、森の中に入っていった

だけど…ナイト達には伝えて無かったけど…実を言うと分身は全部
で3体。

3体の内の二体は火影様の元に、最後の一体がマコト先生達の所に
いる。

まさかとは思ったけど…初代様と二代目様が出てくるなんて…。

初代：「こんな小娘が…火影に叶うとでも言うのか？サル」

三代目：「莉那と言ってな。結構、強いのですぞ。」

莉那（1）：「分身や女だからって」

莉那（2）：「手加減しない方が良いでしょう？」

（1）：「その内に貴方達の首も」

（2）：「取っちゃいますよ？w」

二代目：「ほう…少しはやりがいがありそうだな」

三代目：「莉那よ…手加減はするでない」

（1）：「もちろんです」

（2）：「最初から手加減する気は無いですよ。」

「木ノ葉を守る為ですからね」

三代目：「ほづ。これは頼もしいわい。何なら莉那が五代目でも構わんわい」

(1)：「五代目は…私ではなく」

(2)：「もう誰か分かっています」

大蛇丸：「そろそろ始めましょうか？三代目様」

IN：森の中

ナイト：「おい!!ちょっと待てよ!!」

途中、ナイトが何かを見つけて立ち止まった。

莉那：「時間がないんだけど!!!早くして!!!」

歌怨：「まだか!？」

ナイト：「違いーよ！！この足跡とこの傷後！！！」

私と歌怨は顔を見合わせ、ナイトの元に向かった。

莉那：「これって…」

ナイト：「間違いなく…敵とナルト達だな」

歌怨：「時間を潰しすぎた。莉那、頼む」

莉那：「分かってる！！ 莉那忍法・桜蘭走權 ……！！！」

すると私たちは物凄い速度で進んでいった

進むにつれ…チャクラ気で誰かがいることが分かった。

歌怨の「止まれ。」という声で私たちは止まった。

莉那：「シカマル！！！！」

ナイト：「足止め…っていうより、劣りだな」

そう言っていた瞬間、後ろから煙臭いおっさんがやってきた

アスマ：「ふう…やっと追いついたぜ」

ナイト：「ああ…！！アスマのやるーだ…！！」

莉那：「いの上忍の先生だよね？w」

歌怨：「ああ。マコトから永遠のライバルだとか聞いた事もあった」

莉那：「それじゃー、ここは急ぐのみだね」

そう言って走り出す私たち

にしてもさっきのアスマ先生、カッコよかったな…w w w

でも進んでいる内に爆音が聞こえた。

IN火影様の麓では…。

来る！！！

(1)：「三代目様！！！！しっかり！！！！」

すると左側から初代目様、右側から二代目様がやってきた。

そのまま三代目様が大蛇丸の所に行き、分身でも火影と対立していた。

初代：「ほう…分身でもやるようだな…」

(2)：「言っただはずですよね？女だからって舐めるとすぐに殺されちゃいますよ？初代様」

初代：「フンッ」

(1)：「水遁…簾縛水！！！！」

二代目：「ッ！！！！！」

(1)：「二代目様、どうしました？W真面目にやらないと駄目ですよッ！！！！！」

そう言うと、片方の腕を抑えていた二代目様を得意の体術で足場を狙った。

だけどそれを読んでいたかのように二代目様は高くジャンプして、離れていった。

(1)：「逃げてないで貴方からも攻めたらどうですか？それとも出来ないとしても言うのですか？」

二代目：「言われなくとも行く！！！！！」

水遁・水衝波！！！！

それを水と氷が庇いになり、二代目様の水が私のチャクラ水となった。

(1) : 「言い忘れましたが…水遁系・氷遁系は使用しない方が良
いですよ？」

水・氷・草のチャクラ食となりますから^^」

二代目 : 「厄介な物だな…」

暗部 : 「あの少女も火影並のレベルについて知っている…」

暗部2 : 「それどころか…初代目様と二代目様を上手く圧している
…」

暗部3 : 「凄すぎる…あんな少女が下忍だなんて…」

(1) : 「やっぱり火影…強い」

一人目の分身は今の所、水で庇いに付けるしかなかった。

そんな頃…もう一人の分身は…。

(2) : 「チツ。木遁忍術…初代様の秘術…」

迂闊だった…。

こんな物まで出るなんて・・・おかげで周りは水の渦と岩高・大朴。

水ならなんとかなるけど…流石に岩と樹木はね…。

すると初代様の雄叫びで私たちに木が攻めてきた。

勿論、草の刃も迫り、分身達は逃げられたけど三代目様はそれに捕まった。

分身達は三代目様の元に行き、クナイで裂き契ろうとしていた。

三代目：「お前たちは離れていなさい！！！」

「はい！！！」

すると三代目様が口寄せをしたらしく、現れたのは大猿の猿魔だった。

猿魔：「哀れだのう…猿飛」

猿飛：「これからじゃ。」

ここは…私も口寄せをするしかない!!!

「忍法口寄せの術・大鷹：鶯駕州!!!!!!」

(ドオオオオンッ

(1)：「鶯駕州!!!悪いけど今回は力を借りるよ!!!!!!」

鶯駕州：『お任せ下さい。莉那樣』

猿飛：「ほう…大鷹の鶯駕州…」

(2)：「水遁・豪滅水!!!!!!」

そして…鶯駕州の力も借りて、私たちは初代様と二代目様の魂を封印しようとした物の…

やっぱり分身では時間がもたない…そういう事で鶯駕州が戻り、今は二代目様の幻術空間の中にいた

それでも三代目様の封印術で、初代様と二代目様の魂を封印出来た。

(1) : 「残るは…大蛇丸!!! お前だけ!!!」

そう言っつて三代目様があつ走つていった。

「三代目様!!! / 猿飛!!!」

一人の分身が大蛇丸の腕をつかんでいて、もう一人の分身が必死に草薙の剣を捉えていた。

(2) : 「何この剣!!! …馬鹿力すぎッ…」

猿魔 : 「もう少しだ!!! 頑張れ!!!」

(2) : 「つて言われても…力が強いッ!!!」

(1) : 「三代目様!!!」

三代目：「分かっておるッ…任せておけいッ…」

(2)：「負けるかッー！！！！！」

猿魔と共に力を合わせる物の・・・やっぱり大蛇丸の握力というものが強すぎて三代目様の中に深く突き刺さっていた。

お願い！！！！十尾！！！！チャクラを貸して！！！！！！

『良からう。好きに使うが良い』

ありがとう…十尾！！！！

すると一人の分身の片手に瑠璃色のチャクラが大量に集結し始めた。

三代目：「それは！！！！！！！」

(1)：「水襲剛流豪雨！！！！！！！！！！！」

(1) : 「え…」

次第には大量の涙が頬を伝って流れ落ちた。

三代目 : 「お前さんの両親は…妖狐に殺されたじゃろ…そしてわしはずっと思っていた。

莉那が : ナルトの中に封印されている…化け狐を恨んでおらぬのではないか…そう思っていたのじゃよ…」

(1) : 「…ツ…そんな事…無いですよ…ナルトは私の大切な弟です…」

私と同じ人柱力…そんな弟だけ、苦しんでいて私は…仲間と一緒に幸せになんて…なれませんツ…」

三代目 : 「そうか…良かったわい…ナルトは…幸せ者じゃの…ナルトの傍に…いておくれ

アイツは…お前さんが付いてないと…だが莉那よ…お前さんも良く耐えて頑張ったな…ありがとう…」

大蛇丸 : 「何故…そこまでして…この木ノ葉を…!!」

三代目 : 「言ったじゃろ…木ノ葉はわしにとって大事な家でもあるんじゃ…」

そう言いながら剣がこっちに向かって来た時だった。

私が片手でその剣の刃を捉え、怒りが増して、今にでも折りそうになった。

(1) : 「アンタだけは…絶対に!!!!」

そう睨むと、素早いスピードで大蛇丸の腹部を物凄い威力で蹴った。

その衝動で、大蛇丸は物凄い音を立てて地面に衝突した。

(1) : 「何だよ…どれだけの人を殺せば…気が済むのよ!!!!」

大蛇丸 : 「!!!!?」

(1) : 「何で…私の大切な人たちだけの命を奪うの!!!!」

大蛇丸 : 「何の事かしら…」

(1) : 「天野一族を殺したのもアンタでしょッ!!!!!!!!!!」

大蛇丸：「あまの…一族!!?」

(1)：「そうよ!!! 私の名前は天野莉那!!!!!!」

大蛇丸：「あの小娘だと!!?」

(1)：「劉冬眼で見たアンタは本当憎らしかった…お祖父ちゃん達の敵…絶対取るって私は決めていた!!!!!!」

そう言うと龍駕刀を出し、チャクラを流し込んだ。

すると大蛇丸も身の危険を感じたのか…立ってどこかに走っていった。

だけどその後を物凄いスピードで相手を切りつけた直後だった。

クナイが飛んできて、水が庇ったが煙玉を使われて気づけば大蛇丸は音忍達の中にいた。

そのまま不敵な笑みを浮かべるとそいつらとともにどこかに向かっていた

猿魔：「猿飛ッ！！！！……お前と言う奴は……」

暗部：「火影様！！！！」

すぐさま火影様の元に行くと、猿魔と言う人が泣きながら私の所に
来ていた。

猿魔：「頼む！！！！力を……貸してくれ……アイツの……猿飛の……敵打ち
をしたいのだ！！！！わしと……契約してくれ！！！！」

(1)：「……！！！！……勿論^^……共に力を合わせよう！！！！猿魔
！！！！」

猿魔：「ああ！！！！もちろんだ！！！！」

そして……私は猿魔とも契約をし終えて新たな戦力となって加わった。

マコト：「莉那！！！！大丈夫か！！！！」

(1)：「マコト先生……」

マコト：「火影様は……」

(1)：「……………」

マコト：「そうか……。お前も良く頑張ったな。後はこっちで任せろ」

そういうと先生は優しい笑顔を私に向けていた。

私はとても罪悪感な気持ちで消滅した。

IN本体の方では……。

莉那：「…………ツ……………」

ナイト：「どうした！？莉那！！」

莉那：「なんでもない……目にゴミがはいちゃって……」

そんな嘘を付きながら私は懸命に流れ落ちる涙の粒を拭いていた。

あの時…私が付いていながらも…火影様のお役には立てれなかった…

火影様は「ありがとう。」って言ってくれてたけど…私は何も出来なかった

何も…何も…出来なかった…

『自分を攻めるでない。火影も言っていただろ…お前は良く頑張った』

でも!!!私は…私は…

『お前は良くやった。そして今度はあの守鶴を操る少年を止めるのが先だ』

分かってるよ…分かってるけど…

そう思っていた時だった。

急に両方の腕を掴まれて速度を上げられた。

ナイト：「余所見してんなよ！！！！」

歌怨：「今は…シノと砂のやつだな…」

莉那：「ッ！！！！……ごめん……」

だけど今度は少し離れた所で爆音が聞こえた。

莉那：「……………」

また私が余所見して走っていたのか…誰かにぶつかった

莉那：「あだッ！！！！！！」

と、変な声を出して前を見るとナイトと歌怨が変な表情をしながら先の方を見ていた。

莉那：「どうしたの？」

歌怨：「あいつが…尾獣化している…」

莉那：「尾獣化？そんな事…！！！！！！」

そこには…右腕が既に尾獣化していた。

莉那：「駄目！！！！」

「「莉那ッ！！！！！！」

私は何としてでも止めないと行けないと思って、全てのチャクラを速度に上げるのに注いでいた。

もう…あの時みたいに…なっちゃ行けない！！！！

何としてでも…我愛羅を助けないと！！！！

ただどその時だった…震えるテマリさんを見つけた。

莉那：「テマリさん！！！！」

テマリ：「お前は…確か…」

莉那：「我愛羅は…！」

テマリ：「あそこ…だッ…」

すると私の腕や服を引っ張るようにしがみついてきた。

テマリ：「頼む…お前にしか…お前にしか…ッ…！」

莉那：「落ち着いて…！！テマリさん…！！…」

ナイト：「ハアッ…ハアッ…お前…どんなスタミナしてんだよッ…」

そんな言葉も聞こえず私はただ、テマリさんの腰を撫でて、安静にさせようとしていた。

するとどこかから「危ない…！！」「危ない…！！」という声で振り返ると、我愛羅が飛ばしてきた砂がこっちに向かってきていた。

だがそれを、氷と水が盾に入った。

テマリ：「この水は…我愛羅と同じ…」

莉那：「大丈夫です^^この水と氷は私を守ってくれるんです。我愛羅が使う砂と同じなんです^^
それと…大丈夫ですよ。我愛羅は必ず…私が止めます!!!」

歌怨：「無茶だ!!!今回ばかりは…化物とやりあうっていうのか
!!!?」

ナイト：「おまけにアイツは人柱力だぞ!!!」

莉那：「…それでもやるよ…我愛羅が化物なら…私も同じ、化物だよ…」

私も生まれながら、この体の中に化物を飼ってる…
でもね、10体もいる化物でも、心優しい尾獣もいるの。あの守鶴もそうだったの…

私と我愛羅にあの事件が起きるまでは…守鶴も優しかったの」

テマリ：「優しかった…?」

莉那：「確か二人、聞いたかったよね?…」

ナイト：「…ああ」

莉那：「私と我愛羅が出会ったのは…10年前、調度私が4歳だった時の…」

013* 我愛羅との出会い【過去編】（前書き）

10年前からです!!!

年とか違っていても気にしないでください

013* 我愛羅との出会い【過去編】

その日、私はお母さんの任務の手伝いで砂隠れの里・風の国に来ていたの。

私たちは小さな家だったけど、片付けとかをしていたの。

その家は幼かった私にとってはとても大きな家だった。

お母さん：『莉那、今日からここが我が家よ！！』

莉那：『大きいねー…ここで二人で暮らすの？』

お母さん：『ええそうよ^^何ヶ月かはいるらしいからね…』

そして部屋も見終わり…新しい国に来ていた事でウキウキしていた私はお母さんに頼んだ。

莉那：『お母さん！！ちょっとお外で遊んで来ても良い？』

お母さん：『良いけど…ここら辺には忍びがいっぱいいるから気を

つけてよね？』

莉那：『大丈夫 水さんと氷さんが守ってくれるから 行ってきま
ーす！！！』

お母さん：『行ってらっしゃーい！！早く戻ってくるよー』

莉那：『はーい』

そして私は子供の声ができる方に向かったら…そこはアカデミー前の
公園でサッカーで遊ぶ子供達がいた

興味津々で見ていた私は、目を輝かせながらプレイをする男の子を
ずっと見ていた。

しばらくすると…ある子は蹴ったボールが高い壁の上に乗っちゃっ
たの。

私はそこで助けなきゃ！！って思った時、ボールが砂と一緒に下り
てきたの。

そのボールを赤い髪の子が受け取って…その子が男の子達に渡した

時、その子達は「逃げろ」「って言いながら逃げていった。

するとその子の周りから砂が大量に出てきて、その子達を捉えようとしていた。

私の気持ちに反応した水がある女の子を庇った。

そしてその後、誰か男の人がその子に言ったの。

すると今度はその男の人がこっちに来てこう言ったの。

? : 『君が…さっき、水で助けた子?』

と。私は首を縦に振ってからその赤髪の子の所に行った。

莉那 : 『私は莉那 ^^ 貴方は?』

と、笑顔を見せながら話しかけた。

? : 『僕は…我愛羅…』

その寂しそうな男の子が我愛羅だった。

莉那：『へえっー、我愛羅って言うんだ^^良い名前だね?』

我愛羅：『そ…そうかな? / / / /』

莉那：『うん!! 我愛羅、一緒に遊ぼうよ!!!!』

そう言った途端、我愛羅が嬉しそうに『本当?!』と聞いてきた。

莉那：『うん!! ね、何して遊ぶ???』

我愛羅：『うんー… 莉那は何して遊びたい?』

莉那：『んー… 何だろう… んー… んー…』

? : 『あのー… 良かったらお家で遊びませんか? ^^』

我愛羅：『夜叉丸、良いの!?!』

夜叉丸：『ええ。勿論ですよ^^こんな可愛らしいお嬢さんと遊べれるなんて良かったですね、我愛羅様^^』

莉那：『我愛羅のお家？行ってみたいーい！！』

我愛羅：『おいでよ！！』

それが私と我愛羅…夜叉丸さんとの出会いだった。

そして次の日も…私は昨日と同じ場所に向かった。

だけどそこにはまだ、我愛羅の姿は無かった。

私が戻ろうとした時、昨日の子たちがやって来て一緒に遊ぼうと言
い出した。

でも私が遊びたかったのは、昨日の子達じゃなくて我愛羅だった。

『一緒に遊ぼうよ！僕たちと遊ぶ方が楽しいよ』

莉那：『私は…我愛羅と遊びたいの…!』

女の子：『我愛羅!?!あの砂漠の我愛羅!?!?』

男の子：『ダメだよ!!我愛羅には近づかない方がよいよ!!!』

女の子：『我愛羅が化物だよ?!近づくと殺されちゃうよ!!!』

そんな言葉にムツとした私は、我愛羅が隠れていた事を知らずにその子達に向かって怒った。

莉那：『我愛羅は優しい子だよ!!!我愛羅と遊ぶ方が楽しいもん!!!我愛羅は化物なんかじゃないもん!!!』

我愛羅：『……莉那……』

男の子：『おい!!我愛羅が!!!逃げろ!!!』

するとその子たちはまた怯えてどこかに向かって行ったけど、私は構わず我愛羅の所に行った。

莉那：『我愛羅！！遊ぼ？』

そう言っても…我愛羅は、俯いていて泣きそうな表情だった。

我愛羅：『莉那は…僕が怖くないの…？』

莉那：『へ？怖い？』

我愛羅：『僕…皆から怖がられてるから…』

莉那：『怖くないよ？』

我愛羅：『え…！？』

莉那：『怖いより静か過ぎて不気味の間違いじゃないかな？w』

我愛羅：『静かすぎて不気味って…（泣）』

莉那：『嘘だよwwでも、我愛羅はすごく優しいもん。私は怖いなんて思っただけよ？』

あ…でもたまに静か過ぎて不気味な程怖いつて思うw』

（バタンツ！！！）

莉那：『お母さん、只今っー！！！！』

お母さん：『莉那！もつと静かに玄関を開けなさいって言うてるでしょ！！！！…ってその子は？』

莉那：『我愛羅だよっ！！昨日、言ってたお友達』

我愛羅：『我愛羅…です／＼／＼／』

お母さん：『あらあら。本当に可愛い子ね^^我愛羅ちゃん、いらつしゃい^^』

その時、我愛羅は嬉しそうに大泣きをしていた。

そんな我愛羅を私は物凄く驚きながら背中をさすって、お母さんはニコニコ微笑んでいた。

そしてある日、私の部屋で遊んでいた時だった。

私は勘が鋭い方で三歳から、十尾と話をしていた。

そして十尾が私にこんな事を言ってきたのだった。

『この者は人柱力。守鶴だな』

私は『守鶴？』って聞いた時、我愛羅が『え！？』って感じの顔をしながらこつちを向いてきた。

我愛羅：『守鶴を知ってるの！？』

莉那：『え？ううん。今、妖龍が“守鶴”って言ってて』

我愛羅：『妖龍？』

莉那：『あ……えっと……』

するとどこかから高々しい声が頭の隅々に響いていた。

？：『俺の事を知ってんのか？』

莉那：『え！？今の誰?!』

『この者の体内に封印されている、化物の事だ』

?：『俺様は一尾の守鶴だぜ』

我愛羅：『……………』

?：『おいおい我愛羅。一々暗い顔をするなよ!?!』

我愛羅：『だって……………僕……………』

何故か話が勝手に進んで行っている……………

でも幼かった私にはとても嬉しく、凄い事だった。

すると落ち込んでいる我愛羅の両手を握って、ニコニコしていた。

莉那：『我愛羅凄いよ!?!』

我愛羅：『本当…？本当に怖くない…？』

莉那：『うん？全然怖くない？』

するとまた、あの声がした。

守鶴：『何ですと！？俺の事が怖くないだと！？！？そんな奴、始めてだ…／／／／お前、名は何だ？』

莉那：『莉那だよ？』

守鶴：『良い名だな…って我愛羅、何赤面してんだよWWW』

我愛羅：『して…ないもん／／／／／』

莉那：『顔がトマトみたいだよ！！！W我愛羅、可愛い？あ！また赤くなってる！！』

我愛羅：『莉那が…そんな事を言うからだよー！！！！／／／／／』

守鶴：『ふうーん…下手惚れって奴かWWW』

莉那：『下手ぼれ？なあに、それ？』

我愛羅：『な／／／／／』

守鶴：『下手惚れか？下手惚れってのh（）（）駄目ー！！！
！！！！！！／／／／／／／／／／／』おいおいWWWマジで下手惚れだな
ーおいWWW』

私にはよく分からなかったけど、二人が楽しそうですずっと笑っていた。

それから…私たちはずっと一緒に遊んでいた。

私は任務の手伝いでアカデミーとかには入っていないく、午後からしか我愛羅とは遊べなかった。

そして今日も私は窓の外を眺めながら、溜息を付くのだった。

莉那：『お母さん、今何時？』

お母さん：『ふふつ。10時29分ちよつとね』

莉那：『はあっ…』

お母さん：『そんなに我愛羅ちゃんと遊びたいの？』

莉那：『うん？』

お母さん：『ふふつ。まるで小さい頃のお母さんみたいね』

莉那：『お母さんもそうだったの！？』

お母さん：『ええ。お母さんはね、アカデミー時代にカッコイイ男の子がいたの。

でも私はくノ一で…余り逢えなかったけど、とつても人気者だったのよ。

余りって言っても…違う国で月2回の演習を行っていたのよ^^
ちなみに誰か分かるかしら？』

莉那：『…んー…誰だろっ…ミナトさん？』

お母さん：『ブー。正解はお父さんよ^^』

莉那：『お父さん！？』

お母さん：『ええ^^それでね、お父さんの周りには男の子ばかりで、女の子たちはすごくキヤーキヤー言ってたの。』

私も見惚れててね…／＼／＼／＼その日は演習で二人一組だったの。』

私は正直、誰でも良いとは思ってたの。それがね・・・お父さんと一緒になったのよ。』

目を輝かせながらお母さんの話を聞いていた時、『こんにちわ…』という声が聞こえた。』

お母さん：『こんな時間に誰かしら？』

私はお母さんの後を着いて行き、すると玄関に立っていたのは我愛羅と夜叉丸さんと我愛羅によく似た男の人がいた。』

すると頭の中から守鶴の声が聞こえてきた。』

『俺は我愛羅の親、嫌いだぜ』

どうして嫌いなのか？それにこの人はだあれ？

『あの男、この国の長だ。つまりは風影。』

『んまあー、そいつは我愛羅（小僧）の実の父親な訳だ』

そ…そっなの！？…；…；…；

『んまさ…そいつ、俺の事をすつごく恨んでんだよー…何か妻の命を襲っただとか…』

俺が砂隠れの生き霊だとかで、小僧共々殺そうとしてんだよ…んだがな！！！！砂の盾で殺せないって訳さwww』

え…お父さんなのに…殺すの…？

『小僧の父はな、最初は小僧を見守ってたんだがな…。』

小僧も恐怖とか言う者でいろんな奴を殺しちゃってんだよな…。』

お前も見ただろ？夜叉丸とか言う奴が止めに入ってたろ？』

あの…時の…

『それだ。俺はさ、この夜叉丸って奴が猫被りに見えんだよ』

猫被り？

妖龍：『本性を隠して、おとなしそうなふりをするのだ。』

でも、優しそうなあの夜叉丸さんが…

『人を簡単に信用しない方が良いぞツ！！！！』

お母さん：『あ。取り敢えず、お上がり下さい^^』

そう言うとお母さんが私の手を引いて、リビングまでやってくると私はお母さんの手伝いで三人に飲み物を渡した。

私と我愛羅はジュースで、お母さん・夜叉丸さん・我愛羅のお父さんにはお茶を渡した。

そして私たちも座ると、風影様は急に真剣な表情になった。

風影：『単刀直入に告げます。…父親としてもこんな事、言うのも何何ですが…これ以上、うちの我愛羅に近づかない方が良いです。それをお薦めします』

莉那：『え？』

お母さん：『……………』

風影：『夜叉丸から聞きましたが…君が莉那さんだよね？』

莉那：『はい…』

風影：『君に聞こうか…我愛羅と一緒にいて、怖くないのかね？』

そんな事を聞くと私は軽く微笑んだ。

莉那：『怖くないです。我愛羅は優しい、本当に良い人です。』

そう言い終えると、我愛羅が驚いた表情で見えてきてそれと同時に風影様が凝眸していた。

お母さん：『莉那の言う通り…我愛羅君はとても良い子です。』

まだ出会って数週間しか経過はしていませんし…我愛羅君の全てを知っている訳ではありません。

ですが我愛羅君にはとても感謝しております。この子は…余り人に心を開こうとはしなかったのです…

この里に任務で来る事になった時も、この子はすっごく不安がっていました。

まさかこの子がこんなに笑うようになったなんて…今でも信じられないぐらいです。

いつもいつも午後になるまではずっと窓の外を見て、溜息ばかりを付いているのですよ^^

何故か…それ程我愛羅君には心を開いている…私はそう思います。

娘をこんなにも変えてくれた我愛羅君にはとても感謝してます^^

『お前ら良いこと言うじゃねーかよお!!!俺は感動したぜ!!!』

(号泣)『

風影：『そうですか…。そこまで…我愛羅を思う人がいるのですね

…』

そう、言うとその人は立ち上がって帰ってしまっただらしい。

すると夜叉丸さんも、立って我愛羅の方を向いていた。

夜叉丸：『我愛羅様はどうなされますか?』

我愛羅：『僕は…莉那と遊びたい!』

すると夜叉丸さんがにこつと微笑んで、『勿論ですよ^^』と言って最後に『ですが、お早めにお帰り下さいね?』と言い残して、風影様の後を追いかけていった。

二人が出て行った後：私は、机に突っ伏した。

莉那：『はう…』

お母さん：『ふふ。お疲れ様^^』

我愛羅：『あの…その…ありがとう…//』

我愛羅がまた、俯きながらもハッキリと聞こえるぐらいに顔を真っ赤にして言った。

そして…時間は流れ、真夜中近くにだった。

どうしても眠れなく、私と我愛羅は屋上で星座を見ていた。

我愛羅：『あ!?!あの星座って何て言うのかな?』

莉那：『あれはね、アンドロメダ座って言うのだよ!!
ギリシア神話の女性で、エチオピア 王ケーペウスと王妃カッシオ
ペイアとの間に生まれた王女でもあるんだよ!!』

我愛羅：『へえっー…その右斜め下は?』

莉那：『うお座って言うのだよ!!』

黄道十二星座って言う星座の中で、トレミーの48星座のうちの一
つなんだって^^』

我愛羅：『それじゃー、下の三角のは?』

莉那：『そのままの、さんかく座って言うの。局部銀河群を構成す
る渦巻銀河の一つでもあってね、アンドロメダ座の近くなんだよ^^
』

我愛羅：『莉那、結構詳しいね…』

莉那：『うん?我愛羅と同じぐらいに好きだもん?』

そんな言葉を聞いた我愛羅は顔を真っ赤にして、また夜空の方に顔

を戻して何かを探していた。

……だけど……そんな幸せの一時が一気に二人を引き裂く地獄の時間へと……変わっていった。

我愛羅：『流れ星！！！！』

莉那：『ど……ど……？』

我愛羅：『ほら！！……まただよ！！！！』

莉那：『本当だっ……！！……って何してるの……？』

我愛羅：『流れ星に願いを言ってるんだよ^^』

莉那：『我愛羅の願いつてなあに……？』

すると我愛羅は物寂しそうな顔で夜空を見上げて、静かに言った。

我愛羅：『……里の皆に認められなくても……僕は皆を守りたい。そして大切な人の為にも愛を尽くしたいなって……／＼／＼』

莉那：『大切な人？だあれ？？』

我愛羅：『それは／／秘密^^』

莉那：『うー…ケチー…教えてよー』

我愛羅：『誰だと思う？／／』

莉那：『んー…夜叉丸さん？』

我愛羅：『夜叉丸もそうだけど…違うかな』

莉那：『えー…んーと…誰だろう…んー…教えてー？』

我愛羅：『正解はー…』

そこまで言った時だった…。

我愛羅の砂と私の水が、底に入ったのだった。

私と我愛羅は驚いて、左側を向くとそこには何本ものクナイと手裏剣が砂と水に捉えられていた。

そして今度は私たちを囲むかのように顔を布で隠した忍びが15人程度いた。

莉那：『怖いよ…我愛羅…』

我愛羅：『大丈夫！莉那は僕が守るから』

我愛羅は、そう言うと懸命な表情で砂の額をした人達を睨んでいた。

その内の5人がクナイや刀を持って、飛び出してきた。

私はその時、怯えて我愛羅の腕にしがみついている、我愛羅は私を抱きしめながら砂に指示を出していた。

『土遁・泥流弾！！！！』

『いやッー！！！！！！！！』

我愛羅：「大丈夫だよ！莉那！！」

そんな言葉を聞いても相手は、ずっと土遁系の忍術を使って水と砂の相手をしていて今にでも私に触れそうになっていた。

014*守りたい者【過去編】

戦い始めて数分……

敵が15人から13人に減り、さっきから敵はチャクラを余り使っていないかった。

それでも大半が息切れをされていて、さっきから砂で守りを固めている我愛羅でさえ、少し息切れをしていた。

私が怯えてずっと我愛羅にしがみついている、我愛羅は私をちゃんと支えてくれていた。

そして『大丈夫だよ！僕が莉那を守るから！』と、言ってくれていた。

私は全然信じられなかった。

さっきまでの幸せだった一時がこんなにも不幸な時間へと変わるなんて……

思わなかった……。

さっきまで楽しく夜空を見ながら、星座の話をして…楽しく微笑んでいたのに…

今では殺し合いに変わっていった。

そして…水と氷が敵の相手をしていた時だった。

忍法・水移動術

一人の敵が、印を組み、そう言いながら水と氷の中に入っていった。

するとガシッ！！という音共に、その敵が私の右腕を掴み、砂と水と氷の盾中から引き摺りだそうとしていた。

それに気付いた我愛羅が、私のもう片方の腕を引っ張り、力一杯引き摺り返していた。

それでも大人の力には叶わずじまいで諦めかけようとした時だった。

私の腕を掴んでいた敵の腕が、砂で覆われ、我愛羅が手を握り締め

た瞬間、『ビチャッ！』という音共に、その男が水の中から消え失せり、盾外で我愛羅によって奪われた腕を見て絶叫していた。

右目下に着いた物を見た瞬間、固まった。

そこにはさっきの人の血だと思われる赤い液体が付いていたからだった。

他の人たちも周りに集まり、何人かで治療していた。

それでも無残な姿で、肘から下は無い状態だった。

力を吸い取られた操り人形のように、私は怯えながら地べたに座り込んでいた。

そして目を大きく見開いて、さっきの映像が頭の中を何度も何度もリピートされていて…

自分でも見なくとも分かるぐらいに顔が真っ青になっていくのを感じた。

すると横から唸り声がして、そっちを見るとそこには尻尾を生やし

た我愛羅がいた。

だけどその我愛羅は、私が知っている我愛羅では無く…別人のように思えた

私は精一杯、震える声でも彼の名を呼んだ。

莉那：『が……あ……ら……』

そう言った直後、物凄い鳥肌が立つのを感じた。

だってそこには…暖かい眼差しで見下ろす目付きではなく…冷たい目付きで…血を欲しがっているような目つきだったからだ…。

もう一度、我愛羅が唸り声を上げるのとともに、砂たちが一気に敵を襲った。

そしてさっきと同じように、敵を砂で覆った。

莉那：『あ……あ……だめ……だよ……』

そう思った私は急いで、我愛羅が上げていた方の腕を触ろうとした
寸前…

我愛羅は、砂の津波を利用して敵たちを砂で虻させながら…

『ビチャビチャビチャッ！！！』という音と、絶叫声が最後にこの
の屋上で響きわたった。

莉那…『ど…………うして…………』

我愛羅…『怪我はない？莉那』どうして殺したの！！！……………
……………』

私は、我愛羅が出して来た手を振り払った。

莉那…『我愛羅は…こんな事…こんな事…』

我愛羅…『人を簡単に信じない方が良いよ…莉那』

その声はまるで、悪魔の囁きだった。

すると今度は我愛羅の砂がこっちに向かってきた。

怖かったけど、私は逃げたくなかった…。

好きな彼と作った唯一の技を…殺しに使われた事が最も嫌だった

そしてあそこまでして殺す必要は無かったのに…。

莉那：『我愛羅ッ…!!どうして!!どうしてッ…二人で考えた術を…あんなのに…』

あれは二人で“大事な人を守る為に使おう”って約束したのに…。

我愛羅：『“大事な人を守る為”そう言ったの、莉那だよ。

僕はその約束を守って使用したじゃないか』

莉那：『!!!?』

まさかの返答で…言い返せなかった。

我愛羅：『もう、莉那が知っているような僕じゃないよ

莉那：『お母さーんッ！！！』

お母さんはしゃがみこみながら、私の頭を撫でてくれていた。

そんな姿に我愛羅は、静止したかのようにじっと見ていた。

お母さん：『大丈夫よ。莉那はゆっくり寝ていなさい^^』

そんな言葉を聞くと…私は深い眠りに落ちていった。

お母さん：『我愛羅ちゃん。貴方には感謝をしていたわ…なのに…

莉那を殺そうだなんて…

我愛羅ちゃんには悪いけど、これ以上莉那に接触する事を許さないわ。』

我愛羅：『！！！！！！！！！！』

お母さん：『辛いでしょうね…でもわたしも辛いわ。

莉那の事を好く思ってくれる子が現れたかと思ったら…殺そうとしていたなんて…。

私は貴方の事をもう一人の弟のように思っていたわ。貴方のお父様が言っていたあの言葉、全て嘘だと思っていたわ…。

でも事実なんて…こんな話は信じたくは無かったわ…でもね、自分

風影：『これはこれは…大変な事になっていたそうですねー…。
話を聞いていれば…どうやら貴方はこの里の裏切り者のようですね…。
…。
そのような者を生かして帰す訳には行かないんでね…』

そう言った途端、お母さんの周りには何人者忍者が見参した。

お母さん：『それが上手く行くのよね。』

お母さんが微笑んだ瞬間だった…。

体が液体化となり、どこか遠い場所に移動をした。

お母さん：『鶯駕州、急いで』

鶯駕州：『任せておけ。背中に乗れ』

背中に乗った途端、『撃てー！！！！』の音が響き渡った。

それでも鶯駕州のスピードには着いて行けず…お母さんは無事に帰

国をしたのだった。

そして次の日…私は気が付くと、病室で寝ていたのだった…。

014* 守りたい者【過去編】（後書き）

何とか過去編、終わっただんですが…

意味が…っていつか…繋がっていない（…）

015*守りたい者2

莉那：「これが私と我愛羅の話なの…。」

あの時、我愛羅は私のせいでもあって殺すようになったと思うの…。」

私があの時…弱かったから…ずっと泣いてたから…それに…。」

テマリ：「それに…？」

我愛羅が変わってしまったのにはもう一つ理由があった。

あの事件を起こした張本人が四代目風影曰く我愛羅のお父さんで、

その司令官が、夜叉丸さんだったから…。」

それに、守鶴が言っていた通り…夜叉丸さんは、猫被りだった訳だし…。」

莉那：「ううん…何でも無い」

そう言った時だった。

語るのに、一生懸命で周りの状況を好く分かっていなかったけど…。

我愛羅がほとんど完全体になりそうで、今はナルトと戦っていた。

おまけに…蛙？を…抱いているんだけど…

…っつて！！！！！！

莉那：「ナルトを助けないと！！！！てことで、残りは任せる！！！」

歌怨：「お、おい！！！！莉那…！」

テマリ：「行かなくても良いのか？」

ナイト：「いいんじゃない？wそれに莉那の邪魔すると何をされるか分かったもんじゃないし」

歌怨：「……アイツは、弱くなんかない…人一倍、強い」

「IN私はというところ…」

ナルト：「…おーい…」

というナルトの声も耳に届かず、私は印を組んだ。

莉那：「忍法・口寄せの術！！エンテイ・ライコウ！！！！！」

そう叫び、木の幹に右手を押さえつけると煙が上がり、二体の虎が現れた。

莉那：「へっへーんだ」

決め顔を見せつけながら、その内の一体が私の隣に来ていたから頭を撫でていた。

ガマ吉：「ま…マジ？！…！？」

ナルト：「ね…姉ちゃん……」

ガマ吉：「姉ちゃん？！…！？」

莉那：「説明は後ですよ　その蛙ちゃん!!」

ガマ吉：「蛙じゃねーよ、コラ!!! 蝦蟇だ!!!」

莉那：「蝦蟇だか何だか知らないけど、私たちの戦いをしっかり見ていなさいよね!!」

そう言うと、エンテイとライコウがギラッとガマ吉を睨み、喉元を鳴らした。

っていつか…さっきから我愛羅の視線が…

『やはり…完全体になろうとしているな…』

莉那：「分かってる!!! エンテイ!!! ライコウ!!! 行くよ!!!」

印を組んでいる途中、ライコウとエンテイ、両体が我愛羅に向かって飛び出した。

莉那：「天野忍法・伍死落花情焰の術!!!」

するとエンテイとライコウの分身が現れては雷と炎の刃をそれぞれ、我愛羅の砂の鎧に打ち付けた。

ガマ吉：「何ですと！！？」

我愛羅の体には大量の稲妻と炎の激痛が体の中を走っていた。

そのせいか…我愛羅が物凄い声を挙げて、よろめき、息が荒れながらも立っていた。

そして私に向かって、怒鳴りながら言ってきた。

我愛羅：「何故邪魔をする！！！！」

莉那：「……………」

我愛羅：「答えるツ！！！！何故俺の邪魔をする！！！！莉那！！！！」

莉那：「そんなの…苦しんでる我愛羅を見てられないからだよツ！！！！！！」

絶対に木ノ葉を潰させたりはしない！！完全体になんかはさせない

「……………それが私の指名だから……………」

そつ…あの時…我愛羅と始めてあったあの日の夜…

夜叉丸さんは夜遅くに家を訪ねて来た。

あの日…夜叉丸さんは、私に訳のわからない言葉を残し、それだけ
言つと嵐のように過ぎ去つていった。

あの時…『いずれ、我愛羅様の体内に眠る力が目覚める時が来るで
しょう…』

その時は、貴方の力で…我愛羅様をお助け下さい』と…。

私には到底、分かるはずがなかった…。

でも、今ならよく分かる。

夜叉丸さんは…我愛羅を心の底から憎んでいたけど…我愛羅の心配
をしていた。

だから私はその約束を守る。

守鶴の為にも…夜叉丸さんの為にも…木ノ葉の為にも良く頑張つて
下さった三代目火影様の為にも…

私は…!!

莉那：「絶対止める…!!」

お母さん…こんな私を許してください…。

お母さんには使つなつてあれ程言われた禁術だけど…

尾獣化しそうな我愛羅を見捨てる訳には行かない…

お母さん…ごめんなさい…

私は心の中で、そう決心すると今度はさっきよりも印を組むスピ
ドが上がり、

私の周辺には十尾のチャクラが流れ出ていた。

莉那：「二人とも…ありがとう…戻って」

ガマ吉：「馬路かよ…勝ちやったのかよ…」

私は我愛羅の元に向かって、そこに座り込んだ。

莉那：「我愛羅…あの時は、ごめんね…私が…泣いてたから…
それで我愛羅は私の為に戦ってくれたのに…最後に“大嫌い”なん
て言っ…ごめんね…」

我愛羅：「り…な…？」

私は懸命に謝った。

涙を流しながら…ずっと。

莉那：「本当に…ごめんね…ッ…」

すると…頬に暖かい感触があった。

我愛羅：「莉那…すまなかつたな…辛い思いをさせて…すまない…」

拝啓、夜叉丸さん。

私、必死で我愛羅を助ける事が出来たんでしょうか…？

私は今でも貴方が最後に残したメッセージの事…

忘れません。絶対に…

あの時貴方は我愛羅に“恨んでいた”と言っていましたか…

私はそう、思いません…。

例え真実がそうであっても…私は信じないと思います。

016* 儀式と修行と暁

それから…中忍試験での起きた、木ノ葉潰しは無事、免れたもの
…。

私は三代目火影様を助ける事が出来なかった…。

そして今日は…木ノ葉を守る為に戦って命を落としてしまった人た
ちの儀式の日だった。

マコト：「火影様……」

先生の、言葉が凄く私にとっては辛かった。

近くにいたのに何も出来なかった。

莉那：「じめん…なさい……」

ナイト：「？」

歌怨：「……………」

マコト…「莉那…。お前のせいじゃない。」

そう言ってマコト先生は俯いてるままの私の頭にそっと手を置き、撫でてくれた。

歌怨とナイトは何の話かさっぱりのもようだった。

莉那…「違うんです…私が…いながらも…」

ナイト…「何の話だ？」

歌怨…「俺に聞くな」

私が…弱かったから…

火影様をお守り出来なかった…。

何も出来なかった…。

初代様・二代目様とは互角に戦えたかもしれない…

でも…私にはただ二人の足止めぐらいしか出来なかった。

何も…何も…。

莉那：「私がいながらも…何も出来なかったんです…っ…」

儀式が終わった後も…私はいつもだったから見晴らしが良く、木ノ葉全体を見渡せれる場所に来ていた。

ただ今日はまるで…私の感情そのものようで、雨が沢山降っていた。

莉那：「三代目様…」

貴方は私に物凄く…優しく接してくれましたよね…。

風の国期間後の…九尾の妖狐のバケ狐事件後…

悲しみにくれていた私に貴方は、私に光という物を教えてくれた…。

『いつまでも悲しくては、屢架が悲しむぞい』

その貴方の言葉が…私を励ましてくれました…。

それなのに私は一度も恩返しが出来なかった…。

すると誰かが後ろから近づいて来た。

「このままだと風邪を引いちゃうぞ？」

そう言いながら傘の中に入れてくれた。

莉那：「マコト…先生…」

マコト：「莉那。お前は十分に頑張った。

そこまで自分を責める必要はあるのか？俺は無いと思うぞ」

莉那：「違うんです…。私は…恩返しが出来なかった…。

三代目様の為に…私は懸命に戦おうとした。

でも…出来なかった。足止めぐらいしか…出来なかった。」

マコト：「……恩返し…か…。」

莉那：「私は…大蛇丸の事がすつごく憎いんです…。」

アイツは…アイツは…一族を滅ぼした嫌な奴…。」

そして…アイツは…。」

まだ誰も知っていない…。」

誰もって訳ではない…。」

アイツは…暁と手を組んで、風影を殺した…。」

絶対に許せない…。」

マコト：「莉那。恩返しがしたいのなら…新しい火影を探し、それまでも木ノ葉を守る事で恩返しになるんじゃないのか？」

莉那：「それは…。」

マコト：「確かに…三代目を殺し、初代様・二代目様の死体（魂）

を使ってあのような事を犯したアイツは憎い…殺したい…だけどな…
大蛇丸や暁、他国が木ノ葉をまた滅ぼそうとしたらどうなる？
火影が居ない今、誰が指揮を取る？」

莉那：「……………」

マコト：「五代目様が見つかるまでは…莉那も木ノ葉の忍びとして…
…守る。
そうだと…三代目様も喜ぶだろ？」

莉那：「うん…私、頑張ります…!!」

マコト：「ああ^^その調子だ」

そして次の日…。

私は一人で…と言うよりも、猿魔と森の奥深い所で修行をしていた。

莉那：「はあっ…!!」

水遁・水隠れの術…!!

そして50m少し離れた先で、移動をした。

土遁・岩隠れの術!!!

今度は、崖の高そうな所に移動した。

木遁・木隠れの術!!!

すると今度は木の中で動けるようになった。

私は今、天野一族に流れる血の力を試そうと、他隠れの秘伝忍術の特訓をしていた。

今、会得したのは【土遁・岩隠れの術】 【水遁・水隠れの術】

【木遁・木隠れの術】 同じみ【水遁・霧隠れの術】

その他には、氷遁・炎遁・草遁・嵐遁・昌遁。

昌遁はほとんど、紅蓮さんから教えてもらってほぼ会得していた。

元はと言えば、【水】・【氷】・【草】は私が得意とする属性でもあったわけだし…。

猿魔：「その調子だな。徐々にチャクラが増しているぞ」

莉那：「猿魔：ありがとう^^」

猿魔：「それじゃー、戦ってみるか？」

莉那：「うん!!」

猿魔：「その勢いだ!!行くぞ!!!」

そして猿魔の自信とするスピードで、責め上がって来た。

蹴りを入れても、それに水が反応して、防御する。

その繰り返しで…朝の特訓は、終わった。

莉那：「ハア…ハアツ…猿魔…ありがとう…」

猿魔：「また会おう…ハアツハア…」

「IN火の国にて」

莉那：「たまには一息も良いよね」

そう思っで入ろうとした時だった…。

何か…寒気がした。

莉那：「まさか…ね…。」

カカシ：「お。莉那じゃないか」

莉那：「カカシ先生？どうしました？」

カカシ：「これからサスケと会う約束をしてるんだけど、莉那も来てくれないか？」

莉那：「え？…構いませんけど…」

カカシ：「良かった^^中忍試験で披露した“螺旋丸”をサスケの“千鳥”のパワーアップ方を教えて貰いたくって」

成程…。

莉那：「了解しました^^」

そして先生に案内され、来た所には…。

歌怨とナイトもいた。

ナイト：「はたけカカシ！！テメーはいつまで待たせてんだよ（、
、）！」

カカシ：「アハハ；…ごめんごめん；…後は…サスケだけだ」

莉那：「歌怨とナイトも？」

歌怨：「まあそんな所だ。修行最中に突如現れては着いて来てくれ

って言われてな。

それで来たら修行手伝いつて言われてナイトは期限が悪い訳だ。まあそれも無理は無いだろうな…。およそ三時間は待たされてるしな」

ナイト：「本当うぜー…」

莉那：「成程ね。それじゃー、カカシ先生。それまでは、お団子でも食べてて良いですか？」

カカシ：「あ、うん^^全然大丈夫だ^^」

莉那：「それじゃー、行こw」

ナイト：「ああ。立ってんのも疲れたしな」

そして私たちはサスケを待つ為、茶屋でお団子を食べる事にして数分…。

私は茶屋の異変に気付いた。

ナイト：「それでよ！マコトの奴が、俺に無茶な要求をしてきたん

だ
」

莉那：「へえ…！？…」

歌怨：「ボソ）気付いたか？」

ナイト：「何でアイツらがいんだよ…」

相手は私たちの事には気づいてないようだけど…：うちはイタチに、霧隠れの鬼鮫がいた。

カカシ：「莉那。ちょっと良いかな？」

カカシ先生に呼ばれ、私は一旦外に出た。

そこには紅先生とアスマ先生がいた。

カカシ：「耳元で）アスマ達と一緒にアイツらの後を追え」

莉那：「！！…分かりました」

そして・・・

ナイトと歌怨はあつちに残っていて、私は紅せんせい達の後について行った。

勿論、先生達からは水の中で息を潜めてろって言われて…

外の様子を見ている途中。

そして、今度はカカシ先生がやって来た。

何か話していたようだったけど、私には何も聞こえなかった。

ずっと待っていた時に、カカシ先生からの合図が出た。

それを利用し、イタチの足を引っ張り、水の中に連れ出した。

莉那：「あ；；本当に沈めちゃった；；」

と、地上に出てきながらわざとらしく呟いた

カカシ：「莉那！！大丈夫か?!」

莉那：「私は全然大丈夫です　それで…どうして先生方は目を瞑っているのですか？」

アスマ：「アイツの瞳術を避ける為だ！！お前も早く目を閉じろ！！」

そう言った時だった。

水の中からイタチが出て来て、目が合った。

だけどー…

莉那：「えつとさ…何してるの?」

イタチ：「馬鹿な！！何故、効かない!?!」

私にはイタチが何を言ってるのかさっぱりだった。

紅：「どういう事!？」

アスマ：「何で莉那には万華鏡写輪眼が効かないんだ!？」

莉那：「あ!そういう事なんですか…」

イタチ：「…何者だ…」

莉那：「え?普通の木ノ葉の忍びですけど?」

イタチ：「…は?…ならば質問を変えよう…何故、“万華鏡写輪眼が効かない”んだ!！」

莉那：「んー…こついう事ですょw」

目を閉じ、もう一度イタチの方を見ると、イタチが頭を抱えてふらついた。

莉那：「“龍樺眼”って知ってます?まあ知らないと思いますが…天野一族に伝わる瞳眼術の中でも最強と言われる瞳術なんですょw」

イタチ：「龍樺眼…だと!？」

莉那：「それにこんな事も出来るんだよねー」

そう言つて、今度は龍樺眼の幻術界へイタチを引き摺りこんだ。

イタチは十字架の木に縛り付けられ、周りには沢山の窯を持った死神や、悪魔がいた。

莉那：「ようこそ。龍樺眼の幻術界、“月刹”へ」

イタチ：「月…刹だと!？」

莉那：「ここに来た人は必ず最後は死ぬ。すぐには死なないけどね」
「w」

そう言いながらゆっくりと死神たちが近づいていった。

そしてイタチは苦痛の叫びを上げていた。

紅：「何が起きているの!？」

鬼鮫：「貴様!!誰だ!!」

そう言つて、鮫のような人がフラつくイタチの体を支えながら言つて来た。

莉那：「木ノ葉の忍び、天野莉那。これで良い？」

鬼鮫：「木ノ葉!!? 実力はその上忍よりも上みたいですな… 暁の来れば、もっと強くなれるでしょうに…」

莉那：「悪いけど私は“暁”とか言う悪の組織グループは嫌いなのです。それで… うちがイタチ、貴方に聞きたい事があるの」

イタチ：「……………何だ」

莉那：「貴方の今回の目的… うちがサスケ君だけ? 君の唯一、血が繋がっている兄弟。」

イタチ：「それがどうした…」

莉那：「貴方たちはわざわざ弟君に会いに来たんじゃなくて、別の目的で来たんでしょ？」

鬼鮫：「ほほう…鋭いですねー…どこまで知っているんでしょうかね？」

莉那：「その鮫！！黙ってる！！私が聞きたいのはう・ち・は・イ・タ・チなの！！！」

鬼鮫：「鮫！？…少しはやりがいがあるようですね（黒）」

そう言いながら、刀を振り回してきた。

イタチ：「…四代目火影の遺産術…」

三人：「！！！！？」

カカシ：「（ナルトか…）」

莉那：「それでわざわざ会いに行つては何をするつもり？
そう簡単に“九尾の妖狐”は見れないと思っけどもね」

イタチ：「お前…」

莉那：「何故そんなに九尾の事を知っている”でしょ？
“さつきから話の内容とかでも、何故そんなに知っている”だよ
ね？w
」

アスマ：「（すごい…アイツは本当にこれで下忍なのか…）」

莉那：「私も余り、答えるのは好きじゃないんだけども…。
話の内容は“劉華眼”で見させて貰った！！」

「「劉華眼…？」」

莉那：「それとー…。」

？：「うずまきナルトは莉那の弟だからなーw
」

イタチ：「誰だ…ッ…」

私のすぐ真横に、ナイトが狼たちと一緒に風の中から現れた。

ナイト：「闇月ナイト。コイツがうちはイタチかー…弱そうだなw
」

そしてまた左横から、雷が落ちたかと思うとそれが人の形となり、腕を組みながら歌怨が登場した。

歌怨：「そんな事を言っていると、うちの瞳眼、万華鏡写輪眼で殺されるぞ」

ナイト：「いや、大丈夫ww」

莉那：「それで、任務は終わったの？」

歌怨：「アイツが一人で行くつと言ったから後を追ってきた」

ナイト：「つて訳だ。」

鬼鮫：「次から次へと…」

歌怨：「霧隠れの…鬼人、鬼柿鬼鮫か…」

ナイト：「そんな奴、いたっけか…ｗｗｗ」

イタチ：「…まあいい…一旦ここは引くぞ」

そう言い、消えていく二人。

莉那：「はい、皆さん。目を開けても良いですよ^^」

その夜。。。

何故か家に…エロ仙人がいるんですけど…

莉那：「あのっ…何で家に居るんですかね？」

自来也：「おお！来たな！！お前さん達に用が合っつて来んじや。

明日から、修行の旅に出かけるぞい」

莉那：「…は？」

自来也：「明日の朝、大門に集合じや。

お前さんの他にもナイトや歌怨、ナルトも来るぞい（笑）」

莉那：「へえー…って…はあ!？」

自来也：「なーに心配すんじゃない。すぐに戻ってくるぞ。」

そう言いながら、窓から下りていった。

017*ナルトの修行

そんなこんなで次の日…。

ナルト「修行ッー修行ッー、私は元気ー修行、大好きー！どんどん鍛えるぞー」

ナイト：「ウスラトンカチ黙れや。雑音やるーが!!」

莉那：「っていつか何その歌」

ナルト：「俺様自作の“修行”って歌だつてばよ!!」

歌怨：「…はあ…」

ナイト：「黙ってる。お前のせいで、鳥とかが逃げてんだろーが」

ナルト：「何をー!!!!」

莉那：「はいはい。喧嘩は止め。」

ナイト：「喧嘩じゃねーよ。てめーがうつせーからだろーが!」

歌怨：「それを喧嘩と言うのじゃないのか？」

ナルト：「そーだそーだ!!」

ナイト：「てめーが悪いんだろーが!」

そんな二人を置いて行って、私と歌怨と、自来也さんは先に歩いて
いた。

莉那：「はあっ… ナイトもナルトも幼稚なんだから…」

歌怨：「俺にはさっぱりわからないな。まあどうでも良い事だけど
な」

自来也：「お前たちは大人じゃのー。良い弟子になるぞいww」

莉那：「貴方はエロいおじさんですねー。悪い師匠になっちゃい
ますねー」

私我真顔でそう言つと、自来也さんは硬直し、私と歌怨はそのまま歩きだした。

歌怨：「本当にこの修行とやらは…力伸ばしになると思つか？」

莉那：「ぜーんぜん。第一、今回の目的は五代目火影に就任させようとしてる人の所に行くだけなんですよ？」

歌怨：「らしいな。それならば一人で行けば良い物を…」

莉那：「それがね。五代目に就任させようとしてる人に、私たちを見せたいらしいんだって。

“これが俺の弟子だ”とか言いながらね。」

歌怨：「はあ…。やはり、この修行はろくな事が無いな。」

一番後ろではまだ、ナイトとナルトが喧嘩をしていて…

そして私たちの後ろで自来也さんがトボトボ歩きながら来ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8073w/>

NARUTO ~ナルトの義理の姉は十尾の最強忍者~

2011年12月11日18時51分発行